

を先公に上

専ら御事を被用候砌にて羽倉殿色々建白の筋も候て致承知候故御同人へ段々  
 愚存申候次第も候て既に其義も建白に相成候事にて候所候にも形の如き御始  
 末にて其後は舊に依て因循の御時勢不及是非癸丑の夏亞墨利加の事興り候迄  
 は免に角富津の洲背天險にて有之候へば外夷禍心を懐き候とも決して乗入候  
 事叶ひ申すまじく且相房海岸十數箇所の砲臺を被設夫々御手厚に大諸侯へ被  
 命被差置候へば江戸御膝本へ外夷の侵入候べき道理無之と申す計りの御廟議  
 と被相察候乍然愚意には何分不安心の筋に奉存去る庚戌の春心を決し密々近  
 海の御備向残らず巡覽候處案の如く濟ぬ事共にて十ヶ所に餘り候砲臺一ヶ所  
 として御實用に可相成もの無之總べて兒戲同様の義にて興の醒め候次第富津  
 の洲背とても何の御要害にも相成不申其上右兒戲同様の砲臺海上高く掲げ被  
 置候事故惟其實事に於て益なきのみに無之時々事に託して舶を寄せ候外國の  
 者に本邦の無能をあからさまに被示候筋にて言語道斷の義に有之公邊歴々の  
 御方を始め奉り其御固被蒙仰候諸侯の御家にも夥多の人御座候ひながら斯る  
 拙なき御振舞の有之候事未だ一人として砲兵の眞理海岸防禦の利害等諳熟の

十ヶ所に餘  
 砲臺一ヶ所  
 として  
 御實用に可  
 相成もの無  
 之

時の急務十ヶ條

者無之故の義と餘りに歎かはしく某に於ては多年の講究に依て大略會得の筋  
 も有之且此御時節に當て千萬人の耳目心思の及ばざる所を己獨り知覺候と申  
 すは神明の靈寵に非すと申す可からず去らば本朝八百萬之神靈に奉對候ても  
 黙止ある可きに無之と存じ起候て例の一書をも認め御許容の上は其御筋へ投  
 進仕り度と相企て候所御差留に相成不及是非壬子之冬川司農海防掛の命を得  
 られ候迄は箇中に祕し置き一人他見を許し候事も無之候ひしかども司農は格  
 別の事に付内覽に供し候處某の見込候義司農と雖も信用せられず段々反覆申  
 述候事も候へども猶半信半疑にて尤も擬上書草稿は被留置候ひき然る處其翌  
 夏亞墨利加船容易に内海へ乗り込剩へ驕慢横恣の振舞を極め候へども奈何と  
 もし候事能はず聞く人皆惟齒を切り候のみ爰に至て某が兼て申候處一々符合  
 候故川司農にも防海の議には某の申候處多く聽納せられ候様相成候ひき乍然  
 大舶を海外に購ひながら外國の形勢探知せしめたきの策に至て何分口を開か  
 れ兼候様子に付時の急務十ヶ條を認め阿部相公迄申上候其第一條は右の人を  
 出し舶を購ひ形勢を探知候の策に有之第二條は初めにも申述候江戸御城下東

碁に定石の  
有るが如く

邊砲臺の事兼ての心計にも候故専ら其利害を述べ且其翌春亞人渡來の間に合ひ候様急々御手始め有御座度數も二ヶ所に過ぎず候故至て易簡にして御用途も纔にて可相濟計算に御座候ひき其道に明かならざる人は斯る廣き海面二ヶ所計りの砲臺事足らぬ様にも存じ可申候へ共譬へば碁に定石の有るが如く又上手の打候石の一二目にして其力盤上に響き候が如く其要を得候へば多きを貴び不申又ひたむき並べ候ても其理を得ざる時には下手象棋の自分の駒の邪魔になり候が如く事に臨んで其害を免れず候此道理川司農へも精々申述其頃只今の砲臺の見込江川より申し立候と申すに付某司農へ申候は此策一寸見候所にては海岸砲臺の様候へども元來これは陸戰に土壘を築き候法を杜撰に捏合せ候ものにて甚然るまじく其子細は陸地の戰は専ら守中に攻を寄せ攻中に守を寓し候て其土壘をも現存の人數に應じて之を築き敵に攻む可き機會あれば直に其土壘を出で之を衝きもし攻方不利に候へば又其土壘にて守り候其戰法大略如此に候故に此の如く陸續と築き立て候て利ありて害なく候然る處海中は夫と品替り砲臺を守り候ものは一步も敵を追打ち候事能はず敵

砲艘

を追打ち形勝の闕を補ひ候様には是非共砲艘を用ひ候はねば叶不申攻守全く別手に付斯く臺場數多く候時は夫丈け多分の人數を用候事已むを得ざる勢にて陸戰の人數に應じて壘を築き候とは事體相反し候左候て臺場の模様此の如くに候ては敵のかゝり次第左にて右を救ひ候事不叶右にて左を助け候事能はずあたら御人數を空しく御不用に被遊候義尤も然る可からず且箇様數多く御築立に相成候ては第一莫大の御物入にて此御時節尤も惜む可き御用途に候其上如何様箇様の砲臺を以て内海を御裁截被成候とも砲を備へ候堅固の船澤山無之候ては夷賊萬一近海に群をなし回船の邪魔致し候節追撃の策無之都下の窮困日を數へて待つ可く候偕又砲を備候堅固の船多く有之懸引打放しの業相應に鍛錬行届き候へば某籌策の通り内海の砲臺は二ヶ所にて餘り有る義に御座候天下の財は限り有るものに付無益の爲に多分の費御座候ときは有用の爲す可き處に事を缺き候は必然の理に有之候西洋築城の新法を以て眞の御備の義を申上候へば都城の御模様も御改制無御座候ては不被爲濟夫に準じ大砲の數も莫大無之候ては叶はず是等も容易の御物入に無御座候然るを今斯る杜撰

妄説の爲に不貲の御入料を被爲棄候はんこと天下の御大計に有御座まじく若此某が杜撰妄説と悪口候義御不審に候はゞ此策西洋諸國の内何れの都何れの港に擬し候やと一言御尋御覽可被成候自然も外國に此制有之候はゞ某過言の罪難道候若無之に於ては彼人の杜撰に疑無之候妄人の杜撰御取用御座候より西洋成法の稔と致し候を御取用可然と申候處司農にも被領候て數日の後此程のこと尋ね見候處西洋諸國果して此制無之と被申眉を顰められ候へ共遂に救ひ候事も被出來兼剩へ其掛りをも被蒙命候て只今の砲臺出來に相成候は遺憾の事に御座候ひき此事御座候故に丑年の冬御屋敷に於ても砲臺御出來の上仰を蒙られ候義暗に御防ぎ被置候様愚策申立候義も御座候 其後貴君伊教老より御承知の趣かにて御話御座候には右砲臺御取立の義に付候ては一時某の策多分御取用に相成可き御廟議も候歟の所如何なる事にて江川の策御取用に相成候歟と不審し候仁も候哉に御話御座候にて更に遺憾を重ね候義是れ併し某の不幸に無之天下の御不幸と存候迄に御座候免に角二百年來太平の御風誼にて此時節と雖も第一等の事に回天の御施設無御座嘆はしきことに奉存聊か竊に當今第一の御爲筋にもと謀らひ候義空しく出來損じ候て剩へ

伊教老

浪華砲臺略  
圖

嚴譴を蒙り君家の御體面迄奉毀候に致り候事畢竟かねても申候通り思ふこと其位を出で言其分を踰え止む可くして止まず候より起り候義と今更臍を噬み候ばかりに御座候然る處猶懲りすまに慨憤候ことは此程親戚間より近々取掛りにも可相成と申す浪華砲臺略圖見せ候に付則ち一覽候處けしからぬ結構にて其表江川の杜撰に更に上は塗り致し候様のものにて候其大略は安治川口天保山の西より西南へ四十町の海中へ直線に築出し東南木津川口平尾新田と申迄直線に四十五町尤も其間廻船往來の道を開き平尾新田より西南の方海中へ廿五町直線其邊は海も深く廿尋より廿四尋迄有之候由夫より西北二十町直線に築出し安治川口より四十町築出したると相合す其築き候石堤は幅六十間高さ水際より六間と申事是其大略に御座候始め此圖を見候處餘り素人考故に多分臆作に可有之一昨年勝なども大久保氏に付き其邊見分等も致し候事尤も勝とても其頃は此節とも猶相違砲臺等設く可き形勢等中々諳熟の所へ致り不申候へ共斯かる大杜撰等可申立謂れも無之旁必ず虚傳と推量罷在り候所追々傳聞候へば多分實事の様子爰に至て天下の御爲何分黙止候に忍びず貴君迄極密

得貴意事調はず候迄も一番御周旋被下度奉冀候義に御座候其子細は其表防堵の事も兼々御承知の通り多年の熟考精思にて江川輩一朝の杜撰とは遙に致相違第一數少く候て事濟み候故に御入用容易にて行届き出來の後多くの諸侯方を疲弊し候の患無之事あるときには結句應變の都合よく候はんを其長策は御採用無之却て杜撰妄説之方御取用に相成害を後日に残し候事今更是非に及ばず候浪華の事は未だ手始にも不相成候へば此節或は救ひ候方略も可有之浪華の事某未だ足其地を踏み候はずと雖ども京師にも近く天下樞要の要害に付兼て分見地圖を集め西洋諸國の法に參し砲臺を設く可き位置等熟考罷在候所市中と海濱の間次第新田多に成り候故其表の海岸に逼て人家稠密候とは大に相違にて砲臺を設け候にも至て都合よく御入費とても聊のことにて事十分に調ひ可申と相考居候然る處今度海中の砲臺目論圖面の趣にては幾百萬の御失費相掛り可申や容易に算も及ばぬ程の事に有之候守國實地の眞計より申候へば洋法に倣て三都に外郭を設け内城をも追々に改制し大小の堅艦を造り砲を鑄夫々御人數を班たれ海陸の操練不斷可有御座等無餘儀御物入此上猶莫大に

御座候浪華一ヶ所の砲臺に斯く不費の御用途を被費候はん事天下第一の御失計と奉存候夫とても右一ヶ所御經營御座候て夫にて始終萬全の防禦に相成候へば猶餘儀なき事共と可申候へ共夫さへも智者は別に手段を設け候て不費の失費之掛り候等の事は可成丈相避け財用を延し貯へ候事軍國第一の務めに御座候其上浪華の金穀の湖海たる所以は畢竟東西諸國の船舶輻輳の湊たる故にて候如何様右目論見の通り其邊海に砲臺を被構候とても夷賊に智慮有之其砲力の届かざる邊に船掛り致し廻船の出入を亂妨し候節は追撃に用立候堅艦無之候はゞ其表も同様惟手を束ね神風にても待候の外は有御座まじく候又右の賊計を打破り追撃掃蕩無差支程の堅艦だに有之候はゞ又何の患ふる所候て邊海一ヶ所の砲臺に不費の御用途を被費候はんや寅年春亞船横濱滞在中夷人ども夜に紛れ竊に新築砲臺邊をも端舟を以て見巡り其頃土工最中にて候所夫を見て拙謀の極と訾咲候由の風聞も有之候ひき外人訾咲候は西洋窮理の成法によらず妄人の杜撰御取用に相成候故に可有御座候事立候舉動は一事にても天下之御榮辱に預り候別して近來海外諸國船數多く御許容の場所へ入込居自然

と御國內の舉動探知候時節に付別して此所に御心を不被用候ては叶はぬ事と奉存候其表砲臺理を盡されず候事悔て反らぬことに御座候處是は阿部相公御首座にて御處置御座候に付き其責此公に御座候とも可申候然る所去月中御不幸と申す事に候左候へば其御跡御引受御座候は多く牧野相公に可有御座候相公に於て當今防海の大利害を審にせさせられ其表砲臺一時杜撰の妄説御取用に相成巨萬の御失費相増し候義被爲懲此度浪華の砲臺右に認め候目論見等の御謬舉無御座和漢西洋の兵務にも通じ大小砲使用鍛鍊の者御撰猶有名のものへは草莽の士迄に御詢謀御座候て然る後其結構等御定御座候様有御座度奉存候左候はゞ御首座相替り候義に付其表砲臺の御謬舉牧相公の思食に無御座候と申義も天下に相顯れ浪華砲臺のあらん限り御令名永く世に輝き可申候伊教老御事は御知己の御中にも候閒御内話御座候て右の次第伊教老より密に申し上げられ候様相成候はゞ尙濟はれ候義も御座候はんと奉存候當今御大事の御時勢に御大計其理を不被盡無益の邊に莫大の御物入御座候時は簡要の爲す可き所に御事を缺かれ可申簡要の事に御事を缺かれ候様相成候へば已む事を得ず

伊教老

負惜み等の念を絶ち

(當春は昨春の誤寫か)

下より誅求せられ候に至り可申其誅求の果ては下より上を奉恨候様相成其以往は言ふ可からざる事に至り可申候左候へば御餘儀なき土工の類と雖總て便利の成法を求められ候様仕度ものに御座候西洋諸國にては防海の手段等も可成丈け財用を省き候を手柄と致し候不毛の地を墾開候にも金銀寶石硝黄石炭等相稼ぎ候にも諸産物製作候にも皆其人力を省き入費少なく候て利方多き様工夫を凝らし勝れ候一法發明候者有之候へば自他の差別なく負惜み等の念を絶ち皆夫を用ひ候風俗故に萬事に就き良き成法多く候様奉存候然るに本邦は猶未だ西洋の如く諸學科開け不申候故上下とも偏執の心深く負惜みの念強く依之開け可申學術も早く開け不申天下の御爲甚しき御損と奉存候當春蟻川生立歸の節面會承り候處講武所などの定式も慥に立ち不申其號令の詞など惡劣なるをば某方のに改り候も有之蟻川などの致し候所多く人も見傲ひ候と申事に候然る處此方にて改め見候へば某此地へ引入候以後同生料見を以て致し候邊には其誤り候も候て尙又初に復し候義も往々有之候ひき近來は其表にも原書を読み候もの數多く候よしの所蟻川生一人の誤りを襲ひ候て其表いづ方と

なくカルコを二本指にて遣ひ候と申事依て生をも深く戒め精密に心を用ひ右等の誤り無之候様精々申候へ共是も心長に今一應講究致し不遣候ては猶行届かざる様存じ候事に御座候小銃扱の細技にて尙此位の事に御座候是全く其人に乏しく候故の事と被存候左候て一昨冬以來稽古を始め候人を教頭として海軍御取立に相成西洋軍艦蒸汽船等乗習候修業可有之御達も御座候由の所以ての外なる御事と竊に奉存候手輕き小藝にてすら一兩年の修業にて師匠にはなられず候まして航海の術海軍の懸引等は此上もなき大藝術に候如何なる聰明特達の人に候とも一兩年の功を以ていかでか其術を諳じ得可申少くとも九年十年の寒暑を閲して其藝術に寢食を忘れ候程に無之候ては其事理會得に至り申まじく其事理會得に至らずして人を導き候時は往々大害を引出し候の基と可相成殆ど恐怖此事に御座候去ればこそ往年魯西亞のペートル帝は小成に安んせず禮を厚くして諸國有名の教師を召來し近來トルコにても其蹤を追て海陸の兵制遂に一變し歐羅巴諸州と戦ひ候ても敗を取らざる様相成り候と承り候英雄豪傑の處置皆如此に候故に其成功を收め候も彼の如く速と奉存候當

魯西亞のペ  
ートル帝は

第一等の御  
處置無之

今外國の形勢總て形の如くに候所何故に吾御廟堂には右様の第一等の御處置無之因循苟且の御事のみ御座候哉浩歎の至りに御座候夫と申も兼ての籌策の通り人を海外に出し外國の政教兵備等親しく御探索無御座候より直に彼との御比較無御座候故自然と苟且の御風誼も不被爲振守禦の御大計も其善を不被爲盡義と奉存候人を外國へ出し候て其長を學ばせ師を外國より招いて其藝を世に廣められ候は某獄中腹稿の擬上書にも認め候通り本朝の古き御典故に御座候牧相公の御經理にて此一事御復古御座候はゞ其綱を挈げて萬目皆舉り候の譬防海の御眞計も是より相立ち可申其御令名彌々天壤と無限候義と奉存候某義も海岸砲臺等の義に付ては心を潜め候事多年に候故乍不才聊か所見なきにあらず丑年の見込に於ては既に御廟議にも相成候義其上更に蒙嚴謹候以來も讀書窮理に歲月を重ね候義に付砲臺の位置築法等に至り候ては本邦の内多く人に譲り候はんと存じ不申自然も御時節柄觸犯之刑章御末減を蒙り候て砲臺見込等の義御採用にも相成候はゞ自ら見る可き義も御座候て某一人の幸にも有御座まじく奉存候天下は一家上下は一體箇様に屏蟄罷在自咎之外他事

ある可からず候筈に候所前條の次第何分不堪慨憤此の數紙を重ね候義に御座候何とか御妙計を以て天下の御爲に相成候へば大慶不過之奉存候宜しく御熟計可被下候已上

七月廿二日

啓

樂 眞 君 几下

尙慨嘆の一事有之爰に相記し候横田見込の(以下切れてなし)

安政四年七月廿二日か

〔七〇四〕 村上誠之丞に贈る

廣右衛門

秋熱尙去りかね候御眠食彌御安好に候歟近日傳承候へば去月中旬の末か其表大風雨諸方吹荒し候所も候やに候處貴家に於ては何等の御破損も無之候哉近便裁復の砌其事不承候故御尋も不申候ひき今晚出立いたし候とて廣右衛門罷越申聞け候に付右御左右承度如此に御座候不珍候へども手製之杏脯少々致送進候御晒存可被下候廣右衛門申聞け候には此方へ罷歸り候はいづれ來月中旬頃と申事に候此ものに候へば萬事心届き候ものに付安堵に御座候其節可罷成

は例のボイス殘本六本免てももの事に御惠借被下候様希ひ申候此方に全部有之候へば夫は、重寶の限に候間何分も相願候近日去る方より本邦海岸残らず致測量度段彌利堅人より執政方への呈上譯文借受け候て致一讀候右は御覽も定て可有之と存候一應尤の道理とも聞え箇様の運びに至り候はんと申事も已に明白なる事にて候此文理をば岩瀬修理殿始め感服の様子にて御勘定所などにも拒み方あるまじき様にも被申候と承候所是等道理を以て拒み候に何ばかりの事も無之容易の事と存候周易の王公設險以守其國の大義を申候へば論もなき事と存候然る所何を申も同力度徳同徳量義にて國力此體にては道理十分有之候ても其道理立ち不申扱々痛憤之至と存候事に御座候然る所今日に至り候ても猶第一著に目を注がれ候人の無之候は扱も、世は季に成り候て聖徳太子の未來記に有之候如く此國遂に夷狄の有に成もやし候はんすらん其前兆かと益す、大息にたへず候聖徳の未來記大略中々不思議なるものにて候御覽候事も無御座候歟太平記評判中玄慧法師が師道を説く條に慥か有之候と覺候難信と申せば申すもの、唯この評判を著はし候もの、了簡に出候と致し

聖徳太子の未來記

候ても此節の體たらくを掌を指すが如くしるし有之候事は不思議なる事と存候其表には類本も澤山可有之候へば御一覽可被成候もし早速書物無之候はゞ此方の書其卷便に附し候と也又は其條寫させ候と也掛御目可申候思召次第可被仰下候先は急便草々如此に御座候秋氣千萬多愛

七月廿二日

子 明

村上賢弟 几下

返々ボイスの事何分御允諾可被下候至禱

〔七〇五〕 林修三に贈る

拜白日月矢の如く尊大人御不幸も忽御小祥に近く相成別して可被思召出と奉推察候家父に於ても三十年來一日の如く御懇意に致候て猝に御永訣申候事誠に殘念之至と時々申出悼惜候義に御座候先達ては御丁寧に御手狀をも被下候所此節柄不及拜復失敬之段拙より宜く申上候様申付候儲其後櫻井子に御託し御墓面文字之事被仰越此節右等認候は如何に候へども三十年來之御懇意之廉

安政四年八月廿二日

尊大人御不幸も忽御小祥

御墓面文字之事

空しくし候に忍びず且は姓名も顯はれ候はぬ事故乍拙劣執筆候はんと存じ候折柄此程も御催促御小祥之御間に合ひ候様と申御事に付密々相認申候聊か地下尊靈を慰し候までの志に御座候右の思召にて努々家父の書などと決して他へ御洩し被下まじく無餘儀邊へは貴兄御自筆に被成候趣に御申置可被下候御兩名御不治定と申御事故形の如く相認置き候但し御氏は表面に有之候間側面に又々出候ては重複に相成且古例に無之事に就き相省き上に孝子の文字有御座度候初め櫻井子に申候は貴兄自然御召出しの命を不被蒙候ては人子たるもの私財あるべき様も無之候へば御墓石も王父君御建可被成筋と申候處結構被蒙仰候御様子に候へば貴兄の御立被成候にて筋宜く奉存候若王父君御建立と申ものに候へば表面も是にては然るべからず林某之墓と御實名に被成候か又は御通稱墓と無之候ては不相叶左候て側へは老父某立と可有之事と奉存候自然も左様御模様替御座候はゞ無御遠慮可被仰越候御卒日は御家牒も有之且御墓文等も其内御製しに可相成候へば無之方可然既拙祖父墓表なども家父手書に御座候所卒日は記し不申候此段も御承知可被下候扱御生前蒙命候ソムメ



(小詩は第十卷詩稿十七頁見よ)

ルを讀詩十首残らず認め候様にと申一軸其内意の進み候節揮灑候はんと等閑に致し候内揆らざる御不幸にて御生前一日の御慰にも不相成候こと愧負之至千萬悔恨候へども不及是非乍然御違約は申さざる心得にて右十首相認候所其後清の阮元が望遠鏡中望月歌を和し候一首有之大人御在世に候はゞ御目にかへ候はんものをと家内共とも申合候義に付致追書別に小詩一篇を題し跋尾に加へ候此節柄故態と歲月は記し不申唯延陵季子が劍を墓門に懸け候同様の志に御座候此度一同持せ差上候間御落手之上御牌前へ御備被下度奉頼候將今日晚景近邊出入のものより櫻井子の手簡等は無之唯口上にて此方へ届け吳候様有之候に付届け候とて尊大人御肖像並に奉書紙一刀相届け候一切書演無之候故事の次第不相分候へども御肖像は定て贊辭にても御頼御座候高意と被相察昏は全く御惠投被下候義と感戢不淺奉存候明朝人差出し候はんと存じ申付置候に付御肖像も何とか題し返璧申度候所餘に差迫り候事故に趣向も浮みかね候間是は出來次第跡より御届け申候様可致候先は御小祥も相逼り候事故御墓表文字御間に合候様にと如此に御座候秋冷折角御多愛奉祈候不一

八月二十二日

佐久間恪二郎

林 修三様 侍史

附白貴家北堂君御始此秋冷之候何之御別條も不被成御座候歟江府王父君にも愈御健安にて時々御便御座候御事や御左右委しく承度奉存候然ば尊大人へ奉貸候藥劑字書御寫取相濟候はゞ此ものに御投還被下度若尙御卒業にも無御座候はゞ御卒業の後に幸便御返し可被下候將昨夏大人此方へ御出被下候節コンスブリユウの譯書後世輩の爲かねて家塾にも備へ置き候所慥か米澤にてか活印致し候陋本にてしかも藥方の卷無之不都合に付御藏本藥方の卷だけ拜借小門生に寫させ申度と御無心申候所御承知被下其内御廻し被下候はんと御約束にて候ひし所誠に意外之御凶變遂其義も空しく相成申候決して長留は致し不申小生を督し早速業を卒へさせ直に返璧可仕候間御都合被下右藥方の卷暫時御惠借被下候はゞ感佩不少可奉存候來月は寡君にも參府に相成候に付慥かなる便も易得候此ものに御借與被下候はゞ來月中に無相違返上可申候以上

安政四年八月廿二日

〔七〇六〕 勝麟太郎に贈る

蒲月念二之華簡拜接御學況倍御清勝之御便拜聞奉慰傾企候永日を消し候爲にとて清商の呈稟并に六合叢談抄御寫させ御送り被成下午毎度御深情不淺難有奉多謝候清商之呈に據り候へば國中の亂も十之七八掃平など相見え候へども金陵を復し候にも至らず又英國と兵を結び候ては此末如何成ゆき候はん歟尙甚氣遣はしきものに御座候本邦を申候へば震不于其身于其鄰とも可申候へば如何様にも戒懼修省之實功を加へ度義と奉存候春來彼方留學之御策も被行候はんなど被仰下候所只今に思召通にも參らず候御事と被察候因循苟且之弊一日の事にあらず候へば是又深く恠しみ候に足らず候歟永井殿御事非凡の御行と承り不勝傾慕候但海軍學局を開き海軍の御世話被成度見込御座候との事其志は壯大嘉すべく候へども未だ其道理を得られざる事と惜み存じ候義に御座候いかにとなれば一年兩年の修業にて海上の軍務等其世話行届き候様の手易き事に候はゞ魯西亞之伯多錄も近年之都爾格等も外邦の名士を招來致し申聞

敷依て海軍御取立等も唯一時の文具にのみ被遊候思食に候はゞ夫にても事濟可申候へども大日本の海備をして眞に外蕃に恥ざる様被爲在候はんごには外蕃より名師を御招來御座候て夫を以て教頭に被遊候はでは逆もく行届き申まじくと奉存候高意には如何被思食候や右新聞御投惠之拜謝旁早速拜復申上度と奉存候所其頃是よりも達高聞置度事件も候て兩度迄發書も仕候義に付餘り屢々の往復も此節柄如何とも存候且は御勤學中御妨にも可相成と相扣候内又々初秋六日之芳墨相達し難有拜見仕候其御地霜臺又交代に相成候故萬事御引受にて殊に御繁雜と申御事乍然御興居彌御多祥被成御座候段浣慰不過之奉存候江府御留守宅にも益御碍も不被爲在奉拜慶候賤家幸に無事罷在候間乍憚御省念可被成下候右御多忙之御中荷蘭舶入津にて御新聞の次第數番御書留御惠示被成下乍例耳新しき事ごも多々拜聞屏居之樂是に加ふるものなく千萬奉銘謝候彼方日新の學不相替盛なる事と不堪嘆嗟候御書留中高按之次第一々御尤の御事と左袒仕候魯西亞の密計にて撈葛刺の亂を喚起し候は差向き本邦の大幸と不思議に存申候六萬の衆と申す上に久しく英國に屬し候地に候へば伎

撈葛刺の亂を喚起し

安世義其表  
へ罷越

倆も中々に可有之左候へば早速掃蕩にも至り申間敷被存候何とぞ其間に文具に無之真正之御武備之相立候様仕度ものと奉禱祈候義に御座候安世義其表へ罷越し候由高塾に相願度様申候趣も被仰下親戚之至情稍降心之義には候へども段々内密申上候墮落之上心底宜しからざる者之義に付何かの義有之御迷惑筋等引出し候はんも難計深く恐惶之義に御座候人にして恆なければ以て巫醫と爲すべからずと申候所恆の守無之堯舜の道孝弟のみと申候所孝弟の情至て薄く唯利のある所に趨り候様存じられ候間何分も御油斷なく御取扱可被成下候洋書の義に不正之筋有之候とて譯司四五人召捕に相成候との事品川藤兵衛はかねて懇意に致し候義に御座候是なご其四五人の内には無御座候や甚氣遣候間便間有無御報聞奉冀候洋書之利を貪り候故遂に此禍を引出し候義と被存候當年入津の舶には定て書籍類測器等も多分載せ來り新珍之品々可有之候價なども必ず是迄の如き法外之義は有御座まじく被相察候兼ても願ひ置き候義共何分乍御煩瑣宜しく奉希候圖書等も其表にて仕立可申諸用器當年之舶に積來り候との事幸甚之義に御座候何とぞ公邊向に御差支無之様仕度ものに御座

候其表にて愈ドリユツケレイにても盛に相成候義に候はゞ何様の書にても手輕に手に入可申先已に欣喜罷在候今信何ぞ奉呈度候所遠路心に任せず乍聊料にて懸御目候何か菓子にても御調させ被召上可被下候先は兩度の拜復草略申上候最早此地など秋冷に相成候其御地とても追々冷氣に相成可申候折角御保重被成御座候様奉禱候餘は尙後便可申上候已上

勝 君 臺下

八月廿二日

大星拜復

ポットロード一兩枝エラスチカゴム小片

附白御無心御座候ポットロード一兩枝エラスチカゴム小片御序に御惠投被成下度奉願候エラスチカゴム少々所持仕候所紛失此節不自由仕候に付奉願候義に御座候何分も御允諾奉仰候以上

〔七〇七〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

安政四年九月十八日か

本居の軸

昨宵は御來訪被下緩々得拜晤大慶奉存候其節御話之本居の軸早速御借出し御示し被下辱奉謝候發途前云々御尤の事明朝は早々完璧候様可致候疇昔の奉謝

書簡 聚遠樓時代 (七〇七) 八田愼藏宛

旁匆匆拜答

十八日

澹庵雅兄

大星

安政四年九月十九日か

〔七〇八〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

夜前は風烈に御座候ひし所朝來風も落ち氣候大にゆるやかに御座候御起居彌御佳勝と致想像候儲此間は兼々相嗜候妙品澤山に御贈惠被下家内舉て賞味乍毎度御芳情筆謝難盡奉服佩候拜謝の事家族いづれも宜く申上度段申出候乍憚北堂君御始可然御致謝奉希候將昨日は宣長畫贊の一幀御見せ被下辱奉存候頗る面白きもの故昨日は壁閒に懸候て終日愛玩候ひし事に御座候向ふのつかへ候ものに候へば先早々致完趙候御查入可被下候先は此間の御器還上旁段々の御禮如此御座候以上

十九日

附白有合之微品誠の紙しるに御座候令愛方一時の御慰にも相成候はゞ大慶

不可過之候

澹庵令友文儿

大星拜

安政四年九月廿一日

〔七〇九〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

岡野水井兩家の種痘

今朝は霜威以の外に御座候雅履愈御好安御座候歟然ば岡野水井兩家の種痘其後容子も不承候定て依舊順良と被存候最早追々落痂に及び可申候此節種子甚拂底に御座候閒散落し候はぬ様被心得取集め送り遣し被下候様乍憚御傳聲被下度奉頼候勿論過日種子を下し候節かしづきのものへは能々申置候事に御座候何分可然奉希候儲は御預の絹近日認置き候まゝ致附上候御一咲可被下候殘絹猶有之候又其内に塗抹し可申候先常用のみ匆匆頓首

廿一日

御家事の義

附白御家事の義馬場へ御催促御座候はんと申迄は致承知候處其後の御様子如何やもはや御發駕も明日に迫り申候御様子も無心許乍序及拜聞候

澹庵令友儿下

大星拜

安政四年十月二日か

〔七一〇〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

例の御裏印  
證書等

今日山寺見えられ談次貴家之事に及び某心得候丈の義十分に演説候所同氏大に開悟之様子にて愚意と盡く同意之趣を被申候但不審に存じ候事は賢友御話にては例之御裏印證書等一と先山寺氏へも御見せ被成候様に承候處今日同氏被申候には右様之書類遂に見及び候事無之若右様之慥かなる書類有之候に於ては某見込の義誠に論も無之事と被申候依て某申候には左候はゞ早速差出し御目にかけて候様可申通候間宜く含み被下候様申候所同氏挨拶に御勝手掛の方も乍不肖持居候事に付如何様も同寮とも申談じ可申と申事に御座候右之好機會に候間竹村は留守に候ても先速に例之御書類御持參御示し被成候方可然と存候右に就き愚意には岡野氏御同伴御座候はゞ更に可然と相考候昨年中も貴家の談に及び候所十分に折合ひ不申然る所今日十分に折合候義は竊に察し候所多分例之岡野氏よりの一策馬場より内話にても有之候ひし事と被存候いづれにも宜しき都合に御座候間某より内々御申通じ致し候趣にて尙岡野氏とも

好機會に候  
間竹村は留  
守に候ても

御相談早速御出向被成候様所祈に御座候某に於ても竊に大悦候まゝ草々如此に御座候以上

二日

澹庵 賢友 内事

大 星拜

安政四年十月十三日

〔七一一〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

冬晴御興居何似然ば過日試み候様御申被遣被下候炭甚好く是迄用ひ來り候とは夏別に付何卒此方へも遣し吳候様炭工へ御申被下度奉冀候此程より右之義御頼申候様家内共申聞候處忘れ居今日受催促候に付如此御座候乍序得貴意候過日山寺氏より見せられ候争座帖校本寫させ置き候間御慰に掛御目候五品以上の以上の字升の字大に益を得申候乍去跋尾にも認め候通全唐文にも三字の脱文有之候此に至て陝刻のますく貴きを可知ことゝ存候此校本は追て御還し可被下候以上

山寺氏争座  
帖校本

陝刻の貴きを  
可知

十三日

大 星拜

子 靜 令 弟 几 下

安政四年十月十七日か

〔七二三〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

〔竹村と劇論〕

風故か寒冷に御座候愈御無恙にや御動靜承度候然ば夜前竹村氏見へられ候に付貴家の義に及び段々劇論致し大方は議論片付申候右之義に就き一寸御面話致し度候間御差支も無之候はゞ今夕にも乍御苦勞御枉趾可被下候何も拜眉の節と勿々以上

十七日

澹庵賢友

大 星 拜

安政四年十月廿二日か

〔七二三〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

此間の劇論には實に竹

過夕御來訪之節は乍毎度預御土産痛入辱不勝感謝候然ば及御内話候貴家之義に付沼田屋呼寄せ申談じ候處昨廿一日の事也某見込候かねての趣意よく吞込罷歸り候其上大藏より承り候へば此間の劇論には實に竹村も心服候様子にて既に大

村も心服候様子

藏へも某の正論には一言も無之右丈の事一昨年精々被申候を夫程の義と不存等閑に致し候事愧入候と懺悔有之候よしに御座候左候へば此度は愚意もつらぬき可申と存候委細竹村へも申置き又大藏へも能々心得させ候事には候へども例之證書寫御渡し被成候節尙又某が云々見込を付け候迄は賢友とも御三代右に御念慮をも懸られず候御本意の空しからず候様被成度と申事は能々御申被成候様存じ候昨日大藏へ内意申聞候義一寸得貴意置候序此義も御心得迄申進じ候草々以上

廿二日

澹庵賢友 几下

大 星 拜

安政四年十月下旬

〔七二四〕 山寺源大夫に贈る

重陽には少々御失調の様奉窺候其後被成御續御平善御座候御事や御左右委敷承度奉存候然ば魯公の争座位稿往年慥か全唐文を以て御參校御座候て定本御出来に相成候様奉存候右御定本暫時御惠借被成下度奉冀候萬所仰御座候已上

附白家父近日一詩有之候内々録し入御覽候御一讀の後御燒捨可被下候  
聞虜使得允入城

忽傳虜使入都城 幽憤無那雙淚生 長策蒿萊久埋沒 異言朝市尙縱橫

小童十歲統戎教 新學三年操海兵 虎狼野心非一日 將迎慎莫示吾情

懼堂先生臺下

恪 再拜

〔七五〕 山寺源大夫に贈る

冬晴彌御多勝被成御作止候や小弟は此中旬始微邪に感じ候を兩三度押し候て  
遂再感致し惡寒甚しく此七日許り平臥仕候仕合依て心外に御疎遠申上候幸に  
御照亮奉仰候然ば爰に一奇書有之殊の外先方急ぎ候者には候得共餘り珍敷も  
の且當今人々の心得にも相成候ものに付上覽に入れ奉り度御手迄差上候宜く  
御取計可被下候晝後には先方より必ず取りに參るべく候間御一覽被爲濟候は  
ば□□被成下候様奉願候標題を譯し候へば千八百十三年十四年十五年三年

此の手簡は嘉永六年十二月廿二日以前に於て其の政のなるべし

間の世界大戰記と申事に候則ナポレオンが軍に御座候開卷第一に有之候像即  
其人に候圖の版は銅鐵へ刻し候ものよしに候小弟などは迄鐵版の名目承り  
及ばず勿論見候も初めてに御座候但し此書の圖を見候て存じ合せ候へば當夏  
異船來著の砌蒸氣船の小圖を上へ獻じ奉り候事御座候が夫は多分鐵版にて可  
有御座候又銅版石版の及ばざる精巧の所有之候と被存候戰記の書法も巧者な  
る事にて初に其兩軍を總致し其後左右翼中軍後軍等別々に致し記載候ものに  
候夫故に明細にて分り宜しく候小弟兔角頭痛強く執筆迷惑候に付不能多書草  
草頓首

廿二日

礮卦國字解

附白礮卦國字解の御稿本二三子へも相示し候所一日も御早く御脱稿被下候  
様一同相願候則返璧仕候續て御淨寫に御取掛被下候様御多務の御中奉願候  
も恐入候へ共是又世上の裨益にも相成候事に付何分も御撥冗御卒業可被成  
下候以上

三白爲念申上候此書二本にて其價八十兩と申事に候二三十金位に候はゞ望

も有之御買上の義申立候てもと存じ候所餘り方外の沙汰に付不及其義候右の價のものに候間御次などにて難に御示し被下候義は御用心可被下候

山寺源大夫様

佐久間修理

(以下が安政四年十月廿七日のつか)

附白朱子燭籠之喩之條語類附上仕候様本文相認心當之所檢索候へ共久く打拾置候故か何分早速に見え兼申候依て是は見出し次第跡より差上候様可仕候但記憶罷在候大意は經文は譬へば燭火の如く注文は譬へば燭を覆ひ候籠の如くにて燭籠の格子密なれば燭火自然と暗み候様にて經文の注脚も密に過ぎ候へば本文却て明暢を缺き候様相成候と申大意にて御座候ひきいづれ委くは語類にて御覽可被下候儲實用日抄も多日拜借罷在争座帖校本のみならず種々珍きもの共一涉異聞を弘め難有奉多謝候則返璧仕候御接收可被成下候過日も申上候通御校本の上を猶又陝刻を以て致覆詳四箇所補ひ候所御座候跋尾認め候まま呈覽仕候

實用日抄

跋争座帖校本

是山寺不息所校其朱書者蓋全唐文所載也丁巳秋借觀以陝刻再校之此本父子之

軍之上無以字泪其志哉之上無能字何必令他失位之上無亦字而升別二字不加乙按其文勢皆當以陝刻爲正故今補之

象山外史識

安政四年十月廿七日

〔七二六〕村上誠之丞に贈る

東京市 宮本仲氏藏

歩兵調練圖

七月廿三日附之貴簡相達し久々に披讀面晤を得候如く存じ致大慶候總じて御異事も無御座候とのと降心不過之候此方浦町にも爰許にも如舊御座候間可易御心候中元にも被掛御心品々被下午毎度感愧之至御座候御頼申候歩兵調練圖も早速木村へ御囑し同人手にて寫し候圖懸御目候所殊の外宜しく出來候に付其儘御任せ御頼置き被下御面會之度毎に御催促も被下候趣御申越被下候故其内には御送も可被下此節柄夫を待て一同可及裁謝と延領罷在候へども久しく御音耗も無之候に付七月中之御挨拶旁既に可得貴意と存じ居候處へ去る十八日か本月六日之御一封浦町より御届け被下忙手披見候所寒冷之候彌御無恙のよし先以慰遐想候儲又御頼申置き候圖美事に出來御送被下千萬辱御禮難申

書簡 聚遠樓時代 (七二六) 村上誠之丞宛

六〇七



盡候いかにも宜しく且丁寧にて西洋原版と分寸を争ひ候のみと被存候木村い  
かにもよく致世話被吳候事と存候夫も畢竟被入御念御頼被下候故の義と吳々  
も辱致感泐候此寫手にては寫料も定めて貴かるべく貴く候て固り苦しからず  
今何程殘金相送り可然や早速可被仰下候木村も大厄介致し被吳候事と存候ま  
ま何ぞ謝意を表し度候處此節柄其義能はず但近作に月の詩有之候少しは珍し  
かるべくと存じ候閒録し候て賢弟迄相送り候年號も何も無之候へば先年手に  
入候分にて所藏有之何の差支も有之まじくと相考へ候是を賢弟より能き様に  
御計ひ御贈可被下候圖面いかにも宜しく出來候悦の寸志迄に御座候此墨は外  
より到來有合候まゝ賢弟へ御目につけ候御咲留可被下候儲又毎度別條御記し  
御送り被下辱致大慶候此度彌利堅官吏登城並に都下遊歩其他應接向の大略御  
承知之事御座候はゞ極密御聞かせ可被下候外國の人營中迄も入り候義を御許  
容御座候程にて此國の人を出し萬國の形勢事情親しく御探索有之べき御策の  
立ち候はぬと申は何故の御事か例之慷慨に堪えず候て賦一詩候

忽傳虜使入都城 幽憤無那淚涕生 長策蒿萊久埋沒 異言朝市尙縱橫

近作に月の詩

小童十歲統戎教 新學三年操海兵 虎狼野心非一日 將迎慎莫示吾情  
愚意には免にも角にもかねての籌策の通人材を撰で外蕃諸國へ出し其長を學  
ばせ其政教兵力の程をも能く探知し此方へも責めては荷蘭一國より也と  
も有名の大家を御招き夫を以て教頭に被仰付海陸の練兵等も御座候様有御座  
度候處童兒輩にて陸兵を頭取候の漸一兩年致修業候衆中教頭に成り候て海軍  
稽古始まり候のと申様なる事彌利堅官吏などの耳に入り候はゞ何と致し候も  
の歎と涕泣長大息の外無之候憤嘆の餘遂及此事候御覽後御燒捨可被下候先は  
兩度之貴報迄如此に御座候時下折角御多愛所禱御座候苦しからずば北堂君並  
に令配へも宜しく御致意可被下候以上

十月廿七日

大 星白

村上賢弟

附白此帛も早速認め可申と存じ候所風邪氣にて六七日平臥夫故致延引候其  
表も風邪流行の事被仰下候が此地も同様にて一統感じ申候某も遂免れず候  
ひき乍然幸早速に快方候まゝ幸に御放念可被下候舶來洋書澤山御座候所云

古賀殿など

云之次第にて御手に入兼候由遺憾此事に御座候洋書有用之品天下に水火穀粟の如くに致し候も容易なる策に有之候所古賀殿など夫等の事に念慮無之候事歟當年に至り候ても御仲間にてだに一向手に入りかね候と申は不審千萬なる事に存候此節蕃書調所にては何等の業始まり居候や詞書など取立候はん目論は無之候や何ぞ天文曆學の外に別に學科を被設候事は無之候や測量の學なども開け候様御達しも有之候様承り候測量器械にも珍らしきもの御備に相成居候事か古賀殿にも自分に洋書を被讀候事か何程の力量に被成候事か是等便簡御報聞可被下候

マールン

一、マールンの事何分御遺忘なく御頼申候以上

安政四年十月廿七日

〔七二七〕 山寺源大夫に贈る

昨日は御書惠難有拜見仕候霜氣も如仰先緩やかなる方に御座候倍御佳安奉慶賀候祖母家父不快被懸御心頭御存問被成下毎度御深情感銘不已奉存候祖母の方は大抵平日の如く相成候所家父義只今に咳嗽甚しく日夜三四度宛發汗致し

既に昨夜御使被下候節も發汗中私代筆致し吳候にも相成かね御返事も不申上候仕合其上晝夜夥しく乍憚痰沫を吐き候處其色宛然たる膿に御座候是迄遂に無之事とて當人にて大に懼れ試みに水上へ吐き見候へば盡く浮み候て一髪の沈み候も無之漸夫にて膿には無之全く痰飲の變性致し候ものなる事を存じ安心仕候義に御座候今日に至り候ては其出方も大に減少候へば此分にては不日故に復し可申候乍憚御過念被成下まじく候

羅池廟碑帖朱子絶句集奉示仕候所御悅被仰下大慶仕候

柏原六左所望の義共

柏原六左所望の義共地震記は既に過日も申上候通の次第四祖の墓碑と申ものも一覽候處何分手を入れ候に難相成候命意結構の筒様なるもの家父いか様手を加へ候とても好文章に相成候はんやう無之去りとて此趣意にては頼まれ候とて筆を立て候事能はず依て是は是にて建立候が宜しかるべくと申事に付二冊子附還仕候扱又同人より遣し候料紙並に絹展見候所詩は長篇を認め候への雨中夜陰の山水の作にて世の中を其暗きに比し候詩を懇望のと申事に御座候所詩の賞音固其長短にあらず家父の詩長篇優り候と存じ候ての事歟家父元來

詩人に無之候故得意の長篇など申もの一向無之又父祖以來かゝる難有太平之御世に生れ出候ては其難有事こそ謳歌もし候はんすれども雨中夜中之詩を作り候て世の暗きを譏り候はんなど誠に家父なるものなどの存じも寄り候はぬ事と申ことに候依て料紙絹ごも外より取次ぎ候品にても候へば直に斷り差戻し候筈に御座候へども過日御訪問の砌も御懇の御口上も有之又昨日之御書中にもわけて蒙仰候義に付御體面を奉立候て先其儘預置き候へども當人拜謁仕候折も候はゞ一應御教誨之上當人何なりとも可然頼み候と申に候はゞ先年認め候分に對し揮灑可申若猶望ケましく申候はゞ夫を鹽に御取戻し御返し被下候様仕度と申事に御座候覺巖鬪體贊並に家父の躰括致し候をも仰に任せ別冊に録し懸御目候乍然必ず他へ御話は御無用に可被下候其子細は箇様の筋はいか様申候とて世上俗人の知得べき所に無之又不申候とてても識者明者は能承知の事に候へば先申さぬ方と申事に御座候幸亮此意

角毛偶語  
佛骨表攻め  
方

角毛偶語と題し候雜書是迄名も存じ申さず御藏本御座候はゞいつぞ御惠示被成下度右書中には韓子の佛骨表攻め方淺き様申有之よし家父存意にはかの一

覺巖鬪體贊

過日御訪問  
の砌も

表は全く憲宗の佛骨を被迎候を諫め候が主にて候故其勢彼の如くならざるを得ざる事にて丁度醫の病を治むるが如く頭腦の病は頭腦を治め手足の病は手足を治むるに無之候ては難叶其病む所淺く候を只顧に深く治め候ては端的淺所の病の爲に不相成候是佛骨表の攻め方淺き所韓子の韓子たる所以たるべくと申候偶語之説は如何御座候やらん一讀仕度ものに御座候  
内密申上候兩執政確執の義絶無之事と子習君御案も御同様と申御事夫にて先大安心仕候いかさま不取留事を致推量候ものゝ説にても可有之候吳々早速御探索被仰下難有奉存候

礮卦和解

礮卦和解彌御認足し被成下候に就ては先達て門生へ示し候爲拜借仕候御草稿完璧仕候様被仰下早速依田源へ申遣し候處是より轉傳鹽野氏迄參り居候取戻し候にも無人彼是手閒取れ遂今日も遅く相成候取戻し則還上申上候何分も乍御煩勞奉願度奉存候朱子燭籠之喩語類中いづれの處か御覺無御座候と被仰下候に付其條有之候一本に紙片を挿み候て差上申候序文は仰の如く再考の長き方に仕度跋並に原序は除き候合に御座候元來近日橋をかけ礮卦板行に致し度

朱子燭籠の  
喩  
序文は仰の  
如く再考の  
長き方に仕  
度跋並に原

序は除き候  
含  
毘卦板行之  
事  
肥後藩莊村  
庄林二生

候に就き先年渡邊源藏に命じ板下認めさせ置き候を無心申度其目論手は門人中いづれも有志のものと申内佐倉藩齋藤と申事に御座候然る所毘卦板行之事福山侯御手にて御差留に相成候後も肥後藩莊村庄林二生國元に於て誰となく印刻候事は苦しくも有之まじく西國邊にては刻書の網も至て疎に候へば家父だに許容候へば早速取掛り候合に御座候ひきは丑年冬の事に候然る處家父存念には孔子祭器を簿正するの策にて江戸刻書の密網を一掃し申度心得に候ひし故先暫く待候様に申肥後にて板行候事も差留置き候事に御座候只今様の事に相成候と存じ候はゞ其前早く許し候へば宜しく候ひしとも存じ候事に御座候其莊村生は既に長岡大夫の紹介をも致しかけ候ものにて候隨分手堅き人物にて其上是も齋藤生同様算術に長じ居り家父毎に及び候はぬ事と申候ものに御座候右之莊村に一度許容致しかね候と申候を今更箇様致し居候て著書板に成候を喜び前後を顧みず此度書せ置き候板下迄を遣し候はん事本意にも無之且莊村へ對し候ても義理合然るべからず雙方へ及談合候て共々謀らせ候義出來候へば申分も無御座候へども此節同藩中の知音にてすら文通等出來かね

孔子祭器を  
簿正するの  
策

和解御卒業  
之上...  
迄に齋藤生  
迄御送り

候次第別して他藩且佐倉は此節御役家には有之文通の叶ひ候義に無之其事の橋かけ致し候ものも誠に祕中の祕にて只管家父の著述の世に弘まり候を目的と致し候と申事に付甚不都合千萬にて所謂隔靴痒處を搔くにて御座候其上實は先年御目にもかけ候通りの願文なども出し置き候義に付本文は長く家刻に致し度含なきにあらず乍去此節目論候者の志を空しくし候はんも惜むべき事に存じ段々愚考候處御筆勞の和解之方を以て此度の需に應じ候へば當時有志の士を敗らず肥後藩の士に對し候ても子細無之本文をば刻し候て長く家藏に致し度と申存意も届き前後自他宜きを得ざる所なく候と存付候故既に此間も御煩勞之義奉懇請候事に御座候只今より願ひ置き候は和解御卒業之上免てもの義に御一書を御添へ直に齋藤生迄御送り被下候はゞ尤も妙絶と奉存候此生之名前年齢職名等御尋に御座候處職名當時いかゞや存じ候はず多くは以前の如く候の御側向にて専ら砲學教頭の方勤め居候事と被存候名は初の名碩五郎只今は彌一左衛門と申候實名並に年齢は別帋拙文に詳に御座候此稿外に留無之候閒御電囑御擲返被成下度奉希候

將過日蒙御賞玩候鹽藏櫻子一時之御慰迄に呈上仕候其節も申候如く采時兩三日後れ候故常年より宜しからず候時は先ち候ても後れ候ても萬事ならぬことと此些細なる一事にても發明候事に御座候昨日之拜復旁草々申上候不謹

十月念七日

此昏認畢り候所へ或人參り申聞け候は御近所宮下氏疫熱にて容體宜しからず氣遣はしき程に申候が果して然候や否や當人の外家内大分疫に感じ候もの多く候よし此度等にて家相の無益なるを存じ付き候へば宜しく乍去舊友危篤の疾心を勞し候まゝ御存知之慥かなる義承度爰に附書仕候幸賜御答

懼堂先生三席

恪拜手

安政四年十月廿九日

(七一八) 山寺源大夫に贈る

東京市 山寺源太郎氏藏

角毛偶語

過刻は此間之拜復迄に申上候義に御座候處御繁務之御中累幅之御細酬何とも恐入奉存候祖母家父之義も毎度被掛御心頭難有奉多謝候家父義も今日は午後より別して咳も遠く相成候様子に御座候間乍憚御省念可被成下候角毛偶語之

福島勝樂

事いつぞ拜見も仕度申上候所早速に御持せ被成下是又望外之義丁度病間讀過候に宜しき品とて家父も大悅能々御禮申上候様申聞候此本福島勝樂隱居在京中呈上候ものよし右に付同人物故之事も御惜被仰下家父も御同意の事と申事に候大分に世態を辨じ候もの且宗門之意にも精しき様子に承りいつか良き折も候て一面をも致し其話言をも承り度と存じ居候所舊年俄に歿し候よし残り多く候と申出候義も御座候ひき將又櫻子漬呈上仕候所御移にとて五味子漬拜戴珍感之劇不知所謝奉存候御使參り候節祖母の旁に罷在御回教拜見仕らず候内先賜ものを披き候處美色粲然目を照し候には皆々驚き候義に御座候祖母なども誠に始めて拜見箇様の品見及び候事無之何と申ものにやなど取／＼申候内家父申候に多分五味子なるべし御誨答拜見候はんとて莊誦候へば果して五味子にて一同一啖皆々一房づつ拜味賞玩仕候義に御座候孰も能々御禮申上候第下へも被差上候との御事産は西條山のよし此種に慥に南北之差異御座候様覺え候ひき是はいづれの方にや御序に御教示可被成下候顔色いかにも美事なるものに御座候諸國産物之内種々漬物類も御座候所都門に久しく罷在諸國

の士より其土産とてもらひ候品も數多く候ひし所此五味子漬と申ものは遂に無之且承りも及ばず右故祖母初殊の外珍しく賞賛候義に御座候御漬込は御工夫に御座候か又いづれよりの御傳法に候や是又御序に御誨示奉仰候偕又宮下氏不快餘程の難症の様にも承り儘に御承知之所拜聞仕度申上候處昨日御見舞御座候節の様子並に今日拙簡差上候後以令郎御尋御座候容體委しく御報聞被成下難有奉存候昨日之下利甚敷食氣乏敷大に疲勞候と申様子は家父傳聞氣遣候と合符節候次第にて心痛なるものと申候所今日に至り夜中のまゝ下利無之食餌も朝中かさに軽く一盛進み候と申事に候へば昨日迄の處所謂其峠にて今日より稍快き方に被向候義かと被卜候何分も左様致し度ものに存じ候事に御座候御賜物並に偶語之御禮迄草々申上殘候以上

小盡

御別幅之義何共恐入候乍去是は唯夫子自謂也と家父は一咲仕候義に御座候呵々

山寺先生臺下

恪 拜覆

安政四年十一月三日か

〔七一九〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

昨日は御細答一々得其意候別帑返還御收可被下候扱此間御内話に付ての見込いづれにも竹村能く心得呉られず候ては不都合にも有之御歎願書出候にも其先を開き候もの有御座度候所外に人も無御座候に付某より内々別帑を贈り候はんと存候て認め申候自然事實之相違等有之候ても如何に付一寸御内見可被下候此程御内話之大略は此通と存候が如何や事實もし違ひ候事も候はゞ御附札にても被成被遣可被下候是等の事此節柄祕中の祕に候閒其心得に奉頼候以上

三日

八田賢友

大 星

安政四年十一月六日

〔七二〇〕 山寺源大夫に贈る

此間は再々御誨答御用多之御中御六かしく奉存候爾來先嫩寒にて南至に近寄

書簡 聚遠樓時代 (七一九) 八田慎藏宛 (七二〇) 山寺源大夫宛

六一九

江府虜使登  
城始末

り候處雪も無之例年より大に凌よき様覺候時下御體候倍御清勝被成御座候歟  
奉窺候然ば傳聞候に江府虜使登城始末委しき書立御手へは既に御到來のよし  
さる仁などは拜謁の次御示し御座候ても一讀をも願はずと申上候様承候所夫  
には反し候て一寸片端を承候へども渴望に不堪御無心申上候御寫し留も御座  
候はゞ暫時御惠借被成下度奉懇乞候蒙允命候はゞ何惠當之と奉存候此品乍如  
何到來に任せ懸御目候晚來御下命之御一種とも相成候へば大慶不可過之候先  
は拜願之義のみ草々申上候不字

六日

近作林修庵像贊乍序録往仕候謬も候はゞ何分も御指摘奉願度と申事に御座  
候以上

懼堂先生三席

恪 再拜

〔七二〕 林修三に贈る

安政四年十  
一月九日

至後に相成候ても雪も無之右故か寒氣も例年より緩やかに御座候北堂君御始

御小祥之期

愈御佳安被成御起居候御事や御近況委しく承度奉存候爰許老少瓦全罷在候間  
幸に御過念被下間敷候光陰矢の如くにて先考御小祥之期も被過候へどもいつ  
として御追慕之御弛み候御事も有御座まじくと不堪推察候御内託之御像贊も  
既に認め置き拜借之藥劑篇も校正相濟候に付幸便を待居候處至て都合よき便  
を得候まゝ二件とも致完璧候御接收可被下候御像贊款識を缺き候は此節柄態  
との心得に御座候其内再び世に出候事も候はゞ其節款印可申候藥劑篇原書と  
引合せ候處秤量の誤は至て少く候ひき語の誤も一々正し置き候是は拜借致し  
候御報禮之印迄と存じ候義に御座候先は用事のみ草々申縮候時候折角御厭被  
成候様所祈に御座候北堂前へも乍憚宜しく御申上可被下候已上

十一月九日

附白薄々傳聞候へば加藤高瀬上野諸友嚴譴を得られ候よしづれも讀書講  
學の士いかうの大過も有御座まじき事と被存候所右様之次第と申は偕々不  
得其意候仕官之上には重き罪を蒙り候とて必しも恥べきに無之又顯榮思ひ  
のまゝに候とて必しも譽むべきに無之唯その義理如何のみに候と存じ候義

御像贊款識  
を缺き

に御座候諸友得譴之緣故御承知之御事にも候はゞ極密承り候て安心も仕度  
乍序及此義候事の次第内々御報聞も被下候はゞ千萬辱可奉存候以上

安政四年十  
一月九日か

〔七二三〕 八田愼藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

虜使登城の  
大略

南至に相成候ても雪も無之寒氣も緩やかにて凌能き事に御座候貴家被成御揃  
愈御佳安に御座候歟然ば虜使登城之大略を録し候もの手に入候間懸御目候過  
日上げ置き候をば此者に御擲返被下度候以上

至後一日

靱子相場

附白春夏之際拾圓附上御代市を煩はし候靱子は三拾幾表にて候ひしや當年  
は先入用も無之とは存じ候へども心得の爲承置度候乍御手数數御批誨可被下  
候

子 靜 賢 契 几 下

大 星 拜

安政四年十  
一月十日

〔七二三〕 山寺源大夫に贈る

東京市 久保來復氏藏

御手教拜見仕候如仰昨今寒氣も稍相加り候へども倍御萬福奉恭慶候然ば宮下  
氏不快手充の事愚案申上候次第も御座候處御斟酌之御場合も候て御發言候に  
も相成兼候趣家父も七日夕被仰下候容體には實に驚き候て其翌日か白井子迄  
返却の品有之候序御手帖をも相示し愚意申遣し候義も御座候處昨朝返事有之  
夜前病者へも云々申聞け候と申事にて候ひき然る所小數之惑溺今に至て醒め  
不申方位等を以て醫を招き候など不及是非氣の毒なるものに御座候然る所其  
招きに應じ候策意も大草と同案にて附子の症と見込み既に大草には四逆湯を  
投じ候所致相應心下も和らぎ精神も稍はきと致し七分三分と申所四分六分と  
申程に至り候との事先可悅様には候へども半身少々麻痺の様子と申事右を兩  
醫員は全く中風之氣味に可有之と申候よし此に至て唯々相呆れ物も得申しか  
ね候四逆湯は仲景の説に據り候へば下利清穀手足厥逆の症に用ひ候事と存候  
血液焔崩便色赤黒のものに四逆を用ひ候と申事何の醫經に有之候事にや不審  
の極に御座候漢醫之方書は傷寒瘟疫に限らず粗の粗なるものには候へども箇  
様なる事はあるまじき事の様に存候此間も申上候腐敗熱と申事は漢醫之説に



無之事にて此邊の義は病理之講究も總て無之致講究度存じ候ても元來漢人之心得ざる邊の事にて候へば彼方の醫書千萬卷を通覽候とても知らるべき事に無之候然るを此間の御書中大草始め腐敗熱と申事粗心得居られ候と申被仰下候がいかなる筋にて右をば心得られ候事や既に其腐敗と申事心得られ候程に候はゞ其腐敗を遏止候處方も可有之候はんに其義も無之附劑等を用ひ其熱の本性にて人身の凝體緩縱血液烺解便中黑赤のもの有之四支鉛重半身の麻痺にも至り候と直診は仕らず候へども段々被仰下候所を以致參考左様存じ候處唯其外形のみを認め中風兼并と見込此場にて其手充迄は不行届と申候事のよし扱扱奇怪至極なる醫案と存じ候事に御座候乍去段々仰も被下候通の次第に候へば誠に無據事當人の命脈そこに限り候義外人申に及ばざる事に御座候家父も是にて口を拵み候はんと申聞け候御在府中竹内翁木村菅沼等の傷寒之時節いづれも筑前之醫師湯本某の治療にて危篤を救ひ候事抔御考合御座候へば漢法とても一概に捨て候ものに無之と思食候よし御尤に奉存候夫はかの五穀と黃稗との譬にて五穀の熟せざるは黃稗の熟し候ものにしかず候乍去均しく熟し

候ものに候へば其竝立を得ざるも亦言詞を待す候此間漢洋兩立の義に付御詰問御座候故如此此事にて存出で候深川の邸にて矢澤執政危篤に及ばれ候節小山田大夫等久しく在府にて平日信任の醫師も有之又三村なども手廣にて衆醫を請じ候處一時の選と申事に候ひき然る所其頃家父には未だ西洋の一アの字だにも存じ候はぬ時にて候ひしが一二事醫理を談じ候と御座候所何一ツ妙解無之感心も仕らず候よし其後泰西之醫學に涉り候て其節の議論など存じ出候へば誠にはかなき事共かの時節家父に此節の醫術有之候はゞ執政をも必ず救ひ負せ候はむものをと時としては申出候義に御座候無益之義相止め前條之次第思食通に參かね候とて御丁寧被仰下けく恐入候返すゝ當人運次第何分も命脈の續き候て此危嶮をむぐり被出候様祈る事に御座候此段草々拜復

十日

拙堂文話

附白拙堂文話の事被仰下候此書藏本無之尤も先年在府中澁谷老より借り候て一覽候よし大略松蔭快譚後半の如きものと存じ候趣に御座候扱過日より檢出之上申上候はんと存じ罷在候朱子燭籠の喩に御座候語類中大抵殘る處

なく見候へども見出しかね大全の易說綱領中に御座候て漸一兩日見付申候  
與趙子欽書と有之候故文集續別とも檢索仕候處是又見え不申依て大全中有  
之候を左に録出掛御目候洋書に心を入れ候より自然と漢籍の涉獵懈怠に相  
成箇様の事迄忘失檢査に手閒を費し慚愧の至に御座候御一咲可被下候以上  
朱子與趙子欽書云語孟說極詳易說太略此譬如燭籠添一條骨則障了一路明若  
能盡去其障使之統體光明乃更好蓋著不得詳說也

山寺先生案下

恪 拜復

〔七三四〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

安政四年十  
一月十二日

風邪免角快からず候て例之一帯も大延引今日少く快く覺候に付別紙之通相改  
め申候是にては事實相違も無之と存候爲念一應掛御目候御覽後直に御返し可  
被下候今日にも遣し度如此に御座候

十二日

大 星

慎 藏 様

安政四年十  
一月二十日

〔七三五〕 山寺源大夫に贈る

又白小詩一首録呈仕候御一榮奉冀候以上

過日返上もの御禮旁匆匆申上候處爲貴酬勞專使殊に江都新聞紙御惠示被成下  
重疊感銘奉多謝候御達しにも相成候彌利堅國書世上一統存外平易の事にも申  
沙汰し候かに承候既に來教中にも總て交易御免と相成候へば右御返翰も左迄  
御手閒取も有御座まじく被思食候よしに候所愚見には文面至て平易に相聞え  
候へども御取極に相成候條約の修正も交易の模様替も總て委任し遣し候使人  
の口頭に在りと申ものに候へば其伏して顯はれ候はぬ所に如何様の險惡ある  
まじきにも無之候へば此後の會議を承り候迄は何とも難申けく或人來書云々  
の趣其實にあるまじと難申定候歟と奉存候外國へ遣し其命を辱かしめざる程  
の者を選び差越し候上は文書中其事を丁寧し候に及ばず既に漢土の禮にも大  
夫受命不受辭と有之此度彌利堅の處置全く其意に合し彼國さすがに人ありと  
被存感入候義に御座候尙高意も御座候はゞ相伺度奉存候儲又一昨日は令孫君

御出被下何よりの御土産戴き難有奉謝候いかにもよく御太り御丈夫らしく何より奉慶候其節何の御愛相も無之唯有合の粗品御目にかけて候所昨日は態々右御挨拶御丁寧に被仰下風呂敷御返し被下候に御移迄拜戴何とも恐入候御事に御座候又々新聞紙御手に入候とて御示し被成下毎度難有奉存候此開のとも兩通寫相仕舞候開完趙仕候御草稿ものも此開の一同愚意認め入れ返上仕候御採用に相成候義も御座候はゞ大慶と申事に御座候追々御繁劇と申御事に御座候處よく御手の廻り候義と奉感服候好白君御書の寫し高庇にて初て拜見仕奉銘謝候御文體と申御書體と申恐入候義に御座候小山田大夫よく摸勒を被企候卒業に相成候はゞ御手寄にて一張乞得度奉存候御合置き被成下度候花顔の詩書一覽如仰結句は書損にも可有之假令此書損無之候とも詩は出来ぬ人と被存候書も杜撰と思食候は去る事ながら愚見には王寵を學び候ものと被存候御右筆衆には此様の所能書の分に可有御座候枕山生の詩も御示及久しぶりにて一見大慶仕候如仰詩も今少し出来可申筈に御座候所不調なる事と存候是も星巖なごの手を離れ候て氣まゝに成候故かと被察候詩中の夸娥氏は天帝の女にて山

好白君御書

花顔の詩書

景山公策文

を移し候二人と申事列子に見え候景山公策文中腐心の字尊意の如く苦心と何の別も有之まじく上に焦の字御座候故に腐と被遊候事と被存候全く唯字の對を御求め被成候様奉存候昨日の御禮旁如此に御座候返上もの左の通

御草稿 三葉

新聞紙 二綴

好白君御書牘雙鈎本 二葉

花顔書 一

枕山書 一

御查入可被成下候頓首

廿日

附白此程相窺候令孫君御朱沙記は少しく御年被成候所にて御療治御座候方可然御召使の面上も何とか致し見可申と申候を當人大喜手舞足踏を知らず候程と申義何とぞ其喜に應じ候様參り候へば宜しくと存候免ても一度二度

硝酸銀

にては六かしかるべくいづれ数々塗薬相用ひ度右薬も必ず製し置き候と存  
昨日も心當の匣ごも盡く索し候へごも見え不申多分安世方へ遣し置き夫成  
に相成候かごも被存候左候へば新たに製し候はねば叶はず候硝酸銀と申も  
のにて銀を硝石精に熔化し候ものに御座候いづれ製し上げ候はご知らせ候  
はんと申置き候貅兒蒙礪の假名御尋に付申上候ヒウルモンドに御座候右も  
礮卦解御終惠の思召と難有奉存候乍御六借何分も所仰に御座候以上

謝人惠水仙

懷哉水仙子 翠袖白玉膚 江城一辭別 路遠莫能輸

雙本忽至前 此情豈可虛 寒家梅未發 無奈芳魂孤 大星

懼堂先生契家 恪 再拜

安政四年十一月廿日か

〔七二六〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

御内話の様  
子如何やと

御手簡拜見如仰續て暖氣御座候是も亦不順の事と存候さては先宵松山町御同  
伴にて御來過被下不相變御土産ごも被下何共痛入候義に御座候爾來御内話之

松嘉子……  
夜陰にても  
來訪あり度  
との事

勘治長々面  
上腫物相難  
み療方を求  
め度よし

御様子如何やと今日頃は使にても上げ候はんと存候所御手簡にて尙未だ御分  
りかね候趣相分次第仰も可被下との事委曲相心得申候將又松嘉子云々の次第  
とて別帯をも示及夜陰にても來訪有度との事今夕頃は幸都合も宜しかるべく  
と存候間其段乍御手數御申通可被下候吳服店勘治長々面上腫物相難み療方を  
求め度よし是又いと易き事に御座候いつにても被遣苦しからず候吳服方のも  
のに候へば表向出入更に差支無之候是又宜く御申聞け可被下候親類共内談中  
草々及拜復候以上

廿日

大坂などに  
て山方稀の  
功者と申善  
九郎

別帯一覽則致返璧候餘り不詰りと存候所一ヶ所致下札置候大坂なごにて山  
方稀の功者と申善九郎等は等の次第にては實はたわひもなきものと存じ致  
獨咲候事に御座候

八田賢友 几下

大 星

安政四年十一月廿三日

〔七二七〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

顔帖題跋相  
認め  
挽茶御無心

寒候と申候にけしからず暖かなる事に御座候是も亦不順と可申午去先一日も  
暖氣なる方御同然凌よく候被成御揃御履況定て御平安と奉存候然ば高囑の顔  
帖題跋相認め候まゝ持せ上げ候不相替拙陋御一咲可被下候將近日さる所より  
此なつめを被贈候依て近頃申かね候御無心に御座候御挽置の茶御座候はゞ此  
内へ御惠み被下度冀候御允愈被下候はゞ千萬可辱候頓首

念三

大 星 拜

子 静 仁 友 几 下

安政四年十  
一月廿三日

〔七二六〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

挽茶の事

過刻の御回教にて貴家倍御均慶の状詳悉喜慰不過之候然ば御無心申候挽茶の  
事御有合御座候はゞ聊か蒙御分惠度と申迄に御座候兩三年御取寄せも無御座  
候故御持合せ無之に就ては外御尋被下候はんと被仰下候所右にては本意なら  
ず候間其義は御延引被下棗御擲還被下度奉希候揆らす右器手に入候に付風と  
御有合御無心可申歟と申妄意を生じ候ての事決して彼是御心配をかけ候様の  
其義は御延  
引被下

存念に無御座候間幸に御原亮被下度如此に御座候以上

即時

大 星

澹 庵 兄 座 右

安政四年十  
一月廿八日

〔七二九〕 岡野陽之助に贈る

長野市 秋野太郎氏藏

(伊勢町は  
八田慎藏を  
指す)

小寒の候愈御碍も無御座候邪日々風は烈しく候へども氣候は殊の外緩やかに  
て先々凌よき事に御座候然ば昨日沼田屋大藏參候て伊勢町の事に談じ及び候  
處彼等俗人大義を辨へず例の馬場への御一策などをもつまらぬものに致し候  
はん兆相見え候夫と申もの馬場始め大體に通せず君徳の御美事を賛成候はん  
この料見無之一時事を用ひ候もの、附託を受け果決に事の道理を申上候等の  
事致さぬ覺悟と被相察候是は例の御内託之義等をも御發駕前まで夫成に致し  
置き御供にて出府候はむと申時に及び右之義竹村へ云々申吳候へと申手紙大  
藏へ殘し置き候にて其當節の心の用ひ所大抵被相察候事と存候竹村に於ても  
某より最初反覆致辯論遣し候内書の次第も討論に及ばず其後面會候節は伊勢

(藩主の發  
駕せしは九  
月廿二日)

(宮下兵馬)

町残り居候書面皆用立かね候ものと宮下同役申候など一向不詰り至極之門面話のみにて其以來大藏などより相探り候へば以前は以前當時は當時と片付候存念と被相察候夫は免も角もに候所此節大藏致口入此節の有形を以て簡様ありたしと伊勢町より被申出候様にと申事は愚意にはあるまじき事と存候上にては往古は往古當時は當時にて手の及び候丈を絞り下よりは其術を防ぎ候爲めに彼是と氣隨を申候様にては扱々不體至極の事道ある代と申難かるべくと不堪嘆息依て尙一策を存じ出で申候右に付急に得拜面度奉存候昨今ちと風邪氣にて打臥罷在候へども年内日數も少く相成候處にては不快を押し候ても遂拜話申度極密申上候御障も無御座候はゞ今晚乍御苦勞一寸御過談被下度奉萬冀候何も拜話に於てと早々申殘し候已上

廿八日

恪 二郎

陽之助様 内用御密覽

安政四年十  
二月三日

〔七三〇〕 山寺源大夫に贈る

京都帝國大學藏

求是の字出  
所御尋

過日は御手誨齋藤よりの兩通御示及毎度難有奉謝候右拜復申上度と心がけ候へども其頃より流行之風魔に被犯候て暫く平臥仕不本意御無沙汰申上候一昨日頃より大分快く覺え候開去らば御示しの御草稿へも愚意認め入れ拜報申上候はんと存候處へ又々御投簡毎々蒙御記存奉喜感候先以いつも御康寧奉慶賀候賤疾も今日は又昨日より宜しき方に御座候間乍憚御氣遣ひ被成下間敷候儲至日之高作往行の二字既に迭更の字を傍書仕差上可申心得にて認め落し愧入奉存候既行の御考も去る事ながらやはり目にかゝり候を免れずやと奉存候夫よりは迭更の方穩當の様相考候女工事は女兒巧に御改無御座候方可然候釣舟閑傍は誠に好絶右にて更に御別調に相成珍重淺からず奉存候求是の字出所御尋に御座候處定めて古書中にも可有之又果して見かけ候様にも存じ候へ共只今いづれの書と申事聡と憶記仕らず室に名づけ候は宋の謝顯道が窮理の要は是を求むるに在るのみと申語いかにも妙解と存じ遂に取り名づけ候に御座候其後清人の文字を見候に儒者之道求其是而已の語往々見當り候必ずこの出處も可有之候所謝氏の説とは少差御座候様奉存候儲先達て家父察知罷在

用開の機會  
を失せられ

候通墨使會議に至り容易ならざる事件申出候よし右の和解既に十六日於御城諸侯方御心得の爲佐倉閣老御達しの書付と申事にて御手に入候を早速御示惠被成下毎度、難有奉多謝候右之内御不審の條々御下問奉得其意候一讀仕候所いかさま容易ならざる事共と被存候乍然皆唯孩童を欺瞞候の手段にて罅漏百出見苦しき事ども是に答へ候に於て何かあらむと存じ候事に御座候但々今更申候て甲斐なき事に候へども癸丑以來用開の機會を失せられ今に至て其沙汰無之程の事に候へば固り言語道斷之次第とも可申夫より此極に馴致候事察知もあるべく候を其事も聞えず其間に阿諛逢迎自私自利を被營候衆中のみの事に候へば此罅漏百出之詰難もいかゞかと無覺束存じ候事に御座候竹村御從兄には云々の御見込のよし御人傳にて御承知の趣果して左様に候へば彼御人には甚不満と存申候尤も近日續位も御座候よしに候へば何かと混雜も有之例の聰明も働きかね候所御座候故も可有御座と被相察候勢力匹敵し候ひかね候より遂已む事を得ざる筋有之迄も辭命の上にて於ては一言もなく言ひ伏せ候はねば國體は立ち不申候様奉存候春秋の際に當て鄭の國編小を以て晉楚の間に

辭命も術も  
第一は其人  
の氣魄膽量

介し其兵禍を受け候事殆ど虚歳なく候ひし所子産政を執り候に及んで辭命にあらざれば此大患の免かれ難きを知り裨諝子太叔子羽等の名士を擢用し創草討論修飾の功を盡し更に自身もこれに潤色を施し諸侯賓客交通の間に用ひ候故に毎に敗事あることなく定公獻公襄公の閒合せて五十餘年兵禍を免かれ社稷人民是に頼て保全を得候は詞命の裨益と存じ候ことに御座候乍去其詞命を行ひ候にも墨使の申候術と申もの無之候ては叶はざる事と奉存候晉の平丘之盟に子産承貢賦之次を争ひ日中昏暮に至り候など即ち其術にて富文忠の契丹に使用して盛氣を以て獻納の二字を却け候も同じく此術と毎々感嘆候事に御座候此度とても是等の心得専ら有之度候所如何可有御座や辭命も術も第一は其人の氣魄膽量に依り候事にて去る儒先生の横濱應接に股栗色を失ひ候が如く候ては沙汰の限りと存じ候事に御座候さりながら是まで其輩等にて乞食芝居の如く薦張の臺場を海岸へ築き候の大河筋の御遊山船を金川の海上へ漕ぎ出し候の相撲取を集め被下の俵を運ばせ候のと申を始として餘りにたわひもなき事共を仕盡しこゝに至り候事に候へば今更其應接之機會に合し候様望み

候は免ても不用の事なるべく痛哭の外無御座候辭命の事には右之見解も御座候事故に春秋内外傳の内尤法戒とすべき辭命を

朝聘 盟會 宴享 爭訴 師命 請求 辭謝 吊唁 辨解 問對 抑制  
失辭

右十二門に分け聊か愚管をも加へ辭命準繩と題し後輩の爲にも致し度筆を興し既に略條理を成し候彌淨寫の上は御討論をも第一に相願度と存じ罷在候事に御座候さて御下問之次第相心得候丈左に略々申上候

問一 他國と違ひ親友云々

答 彼れには却て用兵の第一著を暗じ癸丑の夏事を起し候以前數年の閒種々事に託し浦賀下田邊屢舶を寄せ此方にて山上に高く砲臺を築き砲兵之禁忌を毎々犯し候等の陋劣を熟觀し與力同心等の技倆をも悉く探知し候偵十分に行届き候所にて癸丑の夏國書を載せ來り飽迄暴慢無禮を示し降旗など迄も遣り候て恐嚇候所彼れの存じ候坪に此方一言も無之畏縮致し彼れの申に任せられ候是も皆某の先年の建策等御取用に不相成當今之御武備一向に御不調より起

り候事にて譬へば嫠婦の強暴者の奸汚を防ぎかね已む事を得ずその奸汚に任かせ候が如くにて其情懇誠に哀むべく痛むべきの事に御座候一と度その強暴者意を遂げ候より他の暴客又々つけ込候て奸者數多く成り行き候所にて最初の強暴者その嫠婦に向ひ申候はん様は其方此方と通じ候後に他人と通じ候事故に此方に於て其方を良伉儷と存じ候と申候はむに其情虚なるべきや實なるべきや是その爲にせる所あるの詞たる事知者を待たずして知るべきこと、奉存候

問二 他方に所領云々

問三 干戈を用ひ候云々

答 始終是等の御實索御入用に可相成と洞察候故に吉田生を用ひ候秘計にも及び候處忠策畫餅と成り候のみならず只今に嚴譴を被り罷在候次第不及是非候是等の虚實は愚策御取用に相成り慥に閒諜を御用ひ御座候上ならでは明白に知るべき様無之今更廟堂の上にて御悔恨可有御座歟と奉存候

問四 エレキトルテレガラフ云々



答 某心得候所にては尙一時はかゝり申まじく候依て此條の一時の間と申は此方の一時と心得候てはあしく唯一瞬間と申位に解し候方可然と存候其故はエレキテルの感通迅速なる事大抵光の走り候に準候と申事に御座候光の走り候の疾き事誠に無量迅速とも可申大凡人の脈一つに光は此大地の周圍壹萬餘里を三度周匝いたし候程迅かなるものに御座候去れば夫に準じ候エレキテル故に此方の一時などかゝり可申謂れ無之被存候

問五 世界中一族云々

問六 差障取除云々

答 貴案の通

問七 アгент云々

答 ミニストルと申方職名と被存候是は直に君に次で政事を扱ひ候職に付冢宰之譯切當に可有之候アгентは萬事の肝煎と申位に相聞え候故ミニストルを都下置付けに致し度と申事實に容易ならざる事件と被存候何事も此方の御政令を奉行し候事に候はゞミニストルなどの高貴威權の官を置きつけに致し

候にも及ばず高貴威權の官を置き候からは此方の御政令却て其氣色を被伺候様可相成は至然之勢只今より掌を指すが如くに御座候其上重官を都下に置き付けに致候は必ず其屬國の事の様采覽異言中など往々見かけ候様記し罷在候右何れの國の條其證と申事申上度候所此節右書手許に有合せ不申候故不能其義候合衆國の兵威は新國故に軍艦なども英佛に比し候へば其數も少く漸く自ら防禦候に足り候程に可有之候夫故にアгентを此方に置付に致し候とて其勢魯英佛を威服候には固より足り不申候様に被存候へども一國にて先づ手をつけ候場所は他國にて互に仇讐と相成候迄はむざと押領は致し候はぬ盟約にても有之候事と被察候此事聡と地記等にて見及び候事無之候へども近く佛の琉球へ人を置き候始末にて其大略を被察候事と奉存候癸丑の夏墨の本邦へ取かゝり候事情今更相考へ候へば魯にては清の九邊滿洲を望み佛にては琉球朝鮮を欲し英にては此度墨使の啓し候通り魯を制し候爲の始終の長策に本邦と蝦夷地に采頤候事疑ひなく候然る所彼國多事にして未だその事に及かね候間に合衆國にて籌策候は右の如く歐羅諸國に手を延ばさせ候ては自國には始終

押領すべき國もなくなりゆき自然とわが不利に可相成と評議一決候て本邦へ先鞭をつけ候事と被察候ミニストルを置き候迄に至り不申候ては英佛等にて尙いか様の計略有之候はんも難測候故に此事を果敢取らせ度種々欺罔候事と被察候

問八 物品云々

答 いかでか

問九 上危難云々

答 甲辰荷蘭王の忠告は此度墨人の恐嚇とは其情實迥かに別也彼時節御襟懷を被爲披かの王と打込御談合御座候て御紀綱御兵制萬端御更張御座候はゞ愚策等にも申述候通此様外國の御混雜も有御座まじく自然有之候とても當年迄十三四年も相立候事故に御國力御兵備も御丕變御座候て決して此次第には至り申まじく誠に惜しむべき機會を被失候御事と奉存候此度申出候危難云々は清國の殷鑒も去る事には候へども全くアゲントを置附け候はん爲の恐嚇に出で候事にて思慮あるべき事と奉存候

問九 下心を附け候云々

答 しかるべし

問十 アゲント云々

答 唐國政府に於てアゲントの指揮に従ひ候はゞいかさま戦争は興り申まじく候乍去夫にては唐國の政令は有て無きが如く成り行き可申候

問十一 清にて云々

答 當時南京の陥り居り候は清の國內の賊の爲にて英には無之先年英との戦争に南京を被取候と申事犯境録中など見及不申甚難受事に有之候

問十二 英佛とは悉く懇切云々

答 通商に依て相交り候のみ固より與國にて無之事と相見え候距今七十餘年前既に英國と數度の戦に及び毎度打勝ち遂に英の手を離れ獨立の合衆國と相成候程の事に付英佛等に於ても怖れ憚候程に無之候とも随分容易ならず存居候には可有之候

問十三 阿片云々

答 其事は實なるべし其告る所以は恐嚇の術也

問十四 アゲント云々

答 すかす也

問十五 治平打續き云々

答 いかにも

問十六 英雄云々

答 英雄の二字尊意の如く前後相應せず不都合に御座候疑ひ存じ候には是は全く譯の拙き故に可有之候前後の大意を以て推量候へば英墨の語は存せず荷蘭にてタツベルステと申尤も勇あるといふ意 詞を英雄と譯しタツベル勇といふ詞を勇と譯し候ものなるべく被存候其意にて見候時は前後よく照應し候様被存候知術なき勇は尙ぶに足らず候事墨人の申候通にて此節など別して此智術の士中流の一壺と奉存候

問十七 外國にても規則云々

答 御問目の意墨使申立の本條と差異ある様奉存候本條の外國にても夫を規

則にしてと申は合衆國と戰爭にも及ばず堅固の條約を結び候其處置を規則と致し可申と申事に相聞え候御問目の意夫と少々相觸れ候様被存候御再覽御座候はゞ明白と奉存候且合衆國の政法はいか程宜しく候とも免ても本邦にては行はれかね候事に御座候其故は一切君と申ものを建て不申何れの國いか様の生の人ととも第一等の徳慧學問を具し候人物を國中にて撰擇し國の政事を任せ四ヶ年づつにて夫をも亦一替し候と申事に候へば免ても百代一王の皇國なごとは氷炭の差別と存候事に御座候以上尙御考も御座候はゞ御細論所仰に御座候又墨使申立に答へ第一に詰り申度筋は西洋諸國に於て世界中一族一統に致し度欲候は皇天皇土公共の道理より出で自國他國の隔なく生靈を愛育し有無を交通し候はん爲の情願に出で候事歟但しは其各國各國自己の私を營み世界の利を網し候はん爲の私欲に出で候事かと尋ね申度左候はゞ彼れ將に云んとす固より公共の道理より出で候事也と其時此方にて申度候は去らば其方の被申候所全くうけ難く候其故は唐國人民阿片の爲に年々夥しく其害を受け候故に唐國にて夫を嚴禁候は固より當然之道理に候然るを英國にて自國の利

益に相成候とて其人民の殘害をも厭はず其政府の嚴禁をも犯し剩へ唐國にて容易に手出し難相成程に其船に火礮等堅固に致用意其奸を恣にし候是等をば吾國にては強盜の所爲と心得候夫をも貴國にては皇天皇土生靈を愛育する公共の道理とせられ候やと申候はゞ彼方にて何と對へ可申様も有之まじく被存候其時此方にて申度候は既に右の如く被申候所致齟齬不都合に候上は其他被申出候所も同様と被察候本邦に於ては知られ候如く是迄外國交通之事無之候故外國之事情等總て不案内に候右に付貴國と信を結び候上は貴國に信を取り候心得貴國に於ても欺罔の筋等はあるまじき事と存じ候處右之次第甚望を失ひ候緒又英國に於ては本邦へも唐國同様追々阿片持渡り賣弘め候志願と承候唐國の大國にてすら制し難成程に手充致し其奸を恣にし候よしに候へば小國の本邦にて條約の禁のよく制する所にある間敷去りとて他國の奸利の爲に自國の生靈に不利を歸し候事國を保つものゝ忍びざる事に付尙一番の勘辨を加へ天朝へも奏聞を遂げ國中大小の諸侯とも會議の次第も有之候に付申立の條條追て是より可及返報聞一と先引取候様と有之度奉存候夫にて墨使引取候は

ば此所にて御先非御悔悟有之七年の病三年の艾には候へども愚策御取用ひ其人を選び諸州へ間諜を差出候様仕度ものに御座候左無之候ては一の位不相立候故知者ありと雖も如何ともすべからず候就て二詩有之錄呈仕候尙高論御座候はゞ承度候

幾年禁鋼鬢如絲。病臥傷心非爲私。對敵得情須實索。成功出衆在先知。

如何每事失機會。不及制權收便宜。迂拙舊曾存一得。當將心血寄阿誰。

先知未用取人計。孫子明君賢將所以動而勝人成功出於衆者先知也先知者不可取於鬼神不可象於事不可驗於度必取於人而知敵之情者也

虜使話言何得詳。勢力敵均盟可保。威靈偏重和難常。當年宋國從邦彥。

今日朝廷憶李綱。非有蒼天蚤悔禍。爭由婉畫靖跳梁。

重大事件

御草稿二頁齋藤々の申上二通重大事件は業奉完趙候御查入可被成下候八葉の寫しも相濟候に付昨晚拜復認め候はむと申所へ和合見え候て遂色々の説話にて四更後に引取候賤體未だ睨と仕らす候故歎甚睡く覺へ目覺め候迄必ず起し候など家内へも申付ふせり今日起候へば既に亭午を過ぎ候と申事にて漫然清世の一閑人は是に過ぎ申まじくと一咲仕候義に御座候其所へ池村猪郎の藥品々

種痘

取りに参り夫を製し遣し未だ食事仕り候はぬ間に未鐘を報じ候あやにく出入の者の兒女に種痘をも致し遣し彼是仕り候内遂夕刻に相成此紙認めかゝり候所へ望米子内訪にて人定迄被相話夫を遅筆にて認め候所只今半夜の鐘を承候故是にて筆を閑き候八葉の後半御手に入り候はゞ尙又御惠示奉願候以上

三日夜

令孫君御も  
薬りの面部の

令孫君御もりの面部の薬不快にて製し何分不行届さぞ待遠に存じ可申と氣の毒に存じ候へども不及是非候少く快く候へば拵へ候て沙汰可申と御前へ罷出候節乍憚御一言奉願候

丁巳蔭月

□ 再拜

懼堂契家先生

安政四年十  
二月四日

〔七三一〕 依田甚兵衛に贈る

長野市 渡邊萬平氏藏

久敷御安否も不承候當冬は此地にても幾年にも無之暖氣に有之小寒の候に相成候て彌ゆるやかに朝々洗水鉢の水なども氷候はぬ程にて凌よく覺え候其御

地定て同様に可有御座候御動履も被成御揃益御安健と奉想像候令郎今朝も御出被下候處御家内總じて御碍も無御座御安心之御事に奉存候賤家も依舊無事に罷在候乍憚御省念可被成下候借先達ては革下緒之義に付蒙御手数難有奉存候存じ候よりも革並細工も念入にて出來宜く偏に御厚情を以蒙御世話候故の義と別して感銘奉多謝候然る處其後令郎御出被下御話にて承り候へば右料物伴之助より上納致し不申候よし甚以恐惶之至奉存折節伴之助出府致し候と申義に付能々申譯仕預置分上納申上候様申付候義に御座候此度は定て無子細上納は仕候義と奉存候乍去萬々一尙御不義理申上候義に候はゞ一寸此昏に御批答被成下度左候はゞ的便是より送上可仕候亞墨利加使節も大分容易ならざる事申立公邊にも御手数之御事のよし其申立譯文も此頃一覽仕候處多くは欺罔恐嚇の事共と被存候乍去閑諜細作の御用意無之候故萬々虚妄と目をつけ候ても其佐證無之御不都合千萬なる事奉存候家父に於ては畢竟箇様の御時節に運びゆき閑諜のなくて叶はざる節不時の御用に相立候もの拵へ置き候はん内志にて候ひし所其忠策全く畫餅と相成剩へ嚴謹を蒙り候て只今に公家の御手数

閑諜細作の  
御用意無之  
候故

一言も無之  
御申伏せ

に罷成居候事不及是非候亞人此度の申立も家父など一覽候ては甚不詰の事共に付其所を看破候御役人有之一言も無之御申伏せ有之候へば假令跡にて不得已事彼が申に任せられ候事一二有之候とも此度人撰にて罷越し候者一言なく御申伏せ御座候へば聊御國威も相立ち又朝廷に人御座候を感服致しむざと致したる事も以後無之様可相成是は當今の肝心なる義に御座候が右御挨拶なども如何相成候もの歟心配なる義と家父は申居候家父には既に亞人申立不詰の條々致看破箇様應對候はゞ亞人一言も有之まじくと書付置き候ものも御座候へども其表へは無遠慮に付御目にも難掛候色々申上度義も御座候へども隔地不及是非候近日蟻川隱居出府に付何也とも内々の届けもの致し吳可申と申事故時候御見舞過日御手数を蒙り候御禮旁申上此品乍如何態と掛御目候御咲存可被成下候乍憚政君へも可然御致聲奉希候時候折角御保重可被遊候以上

十二月四日

恪 一 郎

甚 兵 衛 様

猶々申迄も無之候へども此昏御一覽後御燒捨可被下候以上

安政四年十  
二月七日

〔七三二〕 山寺源大夫に贈る

墨使詰難の  
略

御惠教拜見仕候此雪にも御興居倍御萬祥の御容子拜聞奉慰鄙懷候賤疾をも御尋被成下難有奉存候先續て快方に及び候間乍憚御省念可被成下候將思食寄珍品ども數々御投惠被成下感戢の劇不知所謝奉存候態と御移掛御目候御咲存奉冀候儲此間返上もの仕候に就き申上候事ども御過賞被仰下汗顔の仕合奉存候墨使詰難の略此程拜啓の後に尙一二言を加へ度かと存候義有之別紙の如く認め見候大略は過日申上候通に御座候へども稍まさりも申し候はむかと存候義に御座候御慰迄供電囑候尙高意も御座候はゞ勿吝垂誨拙吟の御次韻難有拜見仕候御兩首とも面白く奉存候一兩所聲律に付申上度候所御使急ぎ候間跡より返壁可申上其他御惠示の品々も其節愚管可申上候唯渴望罷在候は重大事件後半并に六日の對話と申ものに御座候此度の義は實に皇國安危の係る所と奉存候故右様子柄をも早く承知仕度奉願候可相成は早速御惠示被成下度奉懇願候餘は追て是より申上度先御惠賜の拜謝旁如此に御座候早々不次

重大事件後  
半并に六日  
の對話

七日

猶々別紙は草稿も無之候間御電覽の後御序に御擲還被成下度奉希候以上

山寺老先生

恪 拜覆

安政四年十  
二月十一日

〔七三三〕 山寺源大夫に贈る

面部の藥相試申度候とて御守參り候に付又々御惠書難有拜見仕候如仰存外の大雪に御座候處尊候愈御佳安被成御座喜慰之至奉存候儲御別紙莊内候御同席回狀と申もの御手に入り御寫しに相成候とて御示し被成下如仰誠に大事去矣とも可申唯々浩歎の外無御座候過日も申上候通假令不得已事御許容に相成候筋有之候に就ても詰難を可加處は詰難を加へ閉口さすべき處は閉口致させ候はねば國體は立ち不申候然る所諸有司も皆腰を拔し被居候事と奉存候左も無之候はゞ六日の對話にも今少し體を得候筈に候所餘り埒なしに候第一にミニストルは爵位如此にして職務は如此コンシユルは簡様のものと申位は西洋辭書一部有之候へば誰にも相分り候事又諸國の政道邊に携り候地理書には國々

六日の對話

にて其扱方も載せ無之て叶はぬ事に候へば夫等の爲の蕃書調所に付對話の前夫是の詮議を委しく致し置きさて對話に臨み候ては此方の心得候を根據として問訊も可致事と存候然るを其儀なくミニストルの職務はいかにコンシユルとの差別は如何官爵は何と申様の事に問を發し候ては餘りに無學文旨の沙汰國體を辱かしの候事と嘆かは敷存候事に御座候蕃書調所なども此度様の事に御用無之候はゞ其御役被差置候目的は何に候やらむ不審至極の事共に奉存候如仰常磐夫人を御學び候御手段と外被存不申候前に誤る所あれば後の警に相成候と被仰候へども警め候て前失取返しに相成らず候如何様後悔候ても取返しに成らぬ事も世には有之候故事を其始に慎み弘くこれを人に詢り疑ふ所あればト筮を以てこれを鬼神に質し然る後に事を決し候には無之候哉ト部の事は本邦に於ては神代よりのならはしにも有之又洪範の稽疑にも汝則有大疑謀及乃心謀及卿士謀及庶人謀及ト筮と有之にては無御座候や當今かゝる御大事の時節に夫等の事に目を注ぎ候人都下諸有司事を被用候内一人半人は有之筈と存じ候所其音響を聞き不申候事實に慨嘆之至奉存候某近來つくゞ存じ候

洪範の稽疑  
にも

に此御時節免ても人力のよく濟す所に無之いづれにも其助を鬼神に求め候の外無之鬼神に求め候には卜筮の外無之依て本邦神世よりの習はしに従ひ洪範の教を以て道を知るの人を擇び巫覡賣卜者流は皆大卜筮の人を建立し大疑謀には必ず此人を參し其議を聽かせ候様に相成候はゞ必ず大裨益有之べく存じ且洪範中時に取り格別之義御座候様存じ候て全く今時を救ひ候爲に今解と題し候和解の書を認めかけ申候稿本出來に相成候はゞ可供電囑候是等も少しく世の補ひにもと存じ候所何もく皆時過ぎ候事に相成可申と夫のみ憤悶の事に御座候御守面部藥傅け遣し大抵乾き候間草々拜復迄申上縮候別紙寫し留め則奉返壁候御收入奉伺候以上

十一日

恪 拜覆

常山契家先生

附白草稿もの一通御擲還落手仕候御附書の次第恥入候義に御座候菊池の墨蹟も云々の御様子難有延領罷在候以上

今解と題し  
候和解の書

菊池の墨蹟

安政四年十  
二月十二日

〔七三四〕 山寺源大夫に贈る

東京市 久保來復氏藏

魯峻の碑陰

小寒之候に相成候ても凌よき事に御座候御體履倍御勝常と奉想像候然ば御示及之碑陰拜見仕候所疑も無之魯峻の碑陰に御座候此碑鄭漁仲が説に據候へば蔡伯諧の書と申事に候搦手格則精ならず候様に候へども珍重すべきものに御座候間御藏品に相成候様奉存候此碑拙藏にも無之候所在府中友間より久しく借り置き候て熟知候故碑面無之候ても其碑陰なる事を慥に仕候事に御座候則返壁仕候御接收奉希候將唐宋八家法帖遂に見及び候はぬものに付全部一通り展觀仕置き度奉存候先夕は顔公之帖のみ拜見相願ひ度と申上候所迺もの義に全函を御惠示被下度奉懇乞候御允俞を蒙り候に於ては感銘尤も可無已候頓首

十二日

懼堂先生 丈室

恪 拜覆

安政四年十  
二月二十日

〔七三五〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏



臆底珍敷輕寒に御座候彌御勝常可被成御起居と奉存候然ば此品乍如何到來に  
任せ懸御目候聊か寒中御見舞得貴意候印迄に御座候御咲存奉仰候以上

念日

八田仁友 几下

大 星拜

安政四年十  
二月二十日

〔七三六〕 山寺源大夫に贈る

小山田孺人  
眼疾

御手誨奉欣讀候先以御均慶浣慰の至毎々蒙御記存難有奉謝候老少いづれも健  
安罷在候開幸御過念被成下まじく候其後は江都の御新信も無之昨夕御傳聞に  
は近日御昇進被爲在候との御事御同然恐悅奉存候儲は小山田孺人眼疾云々の  
義承知仕候今井生醫案も一讀候處俗醫の容體書多分箇様のものに候へども候  
證もさだかならず病因も浮きたる事にて是にては詳密の用をばなし不申腫孔  
曇濁白色を帯び候様子と有之候所白色を帯び候故に曇濁なるにや又曇濁は曇  
濁帶白は帶白なるにや分明ならず且帶白も何様の次第や其厚薄も有之候得ば  
是のみにては物を不申又病因の諸毒諸氣も何を申に候歟つゞまり不申候其上

土生に九年  
隨身

近年舶來の眼科書とは何と申原名の書にや近年とさし候は西洋紀元の幾年頃  
を申候や是又孟浪の事其藥方等も何を主藥にていづれの候證に對し候ものや  
是又詳に致し度事に御座候左高も致診察候よしに候へば此容體書の外に尋度  
候はゞ同人へ尋ね候様被仰下候へども眼科の事は同人尤も不案内の様子に候  
へば猶此多門の方用を成し可申と相考候土生に九年隨身修業と申事に候へば  
年數を以て論じ候へば大成の功も有之候筈に御座候但し土生と申ものも原書  
は讀め不申其根基は至て淺々の事に付九年同氏へ隨身もあたら歲月を過し候  
にて可有之と被存候於家父少々考も有之候へば能々其容體をも悉し候て醫案  
をも申出度就ては右多門夜中也とも被遣被下度奉存候彦五郎醫按も御示及一  
涉候處文筆拙く候故何分分りかね候事有之候腫孔陷缺とはいかなる症をかく  
申候や不審千萬に候腫孔の表面陷缺候ては即ち失明候道理にて朦朧不辨物に  
止り候筈は無之又先天の遺毒等の論も浮きたる事の様存じられ候濕毒の上攻  
と申候は黴毒の事にや去らば黴毒と稱し可然末に矢鳩答丸を用ひ候事見え候  
へば是は先大方黴毒の事と被察候還陰解毒湯方心得不申いかなる藥劑を用ひ

彦五郎醫按

候事にや但名稱を以ては漢方後世家の方劑の様被存候白内障針治の事西洋にても致し候かとの御尋に候所此手術は元來西洋に始めて起り候事にて其法渡來候迄は和漢の醫人夢にも存じ候はざる事にて候ひき尤其手術も近來益々精密を極め候て嘆服の事どもに有之候多門なごもその近來の法土生より傳授候や否承度ものに御座候於家父は原書を以て大抵相心得居候杉田なごも土生門下のよし遂承にらぬ事に御座候恐らくは土生の方にて眼科書の譯を杉田へ頼み夫にて益を得候事は多く可有之と被相察候高松藩小橋某遂承らぬ者に御座候如仰發句なご好み候事何の得處無之の驗とも可申候絶句面白き様被思食候よしに候へごも後半調ひ不申併借を致し候に對し候様被存候任命直に返璧仕候神風遺談御垂示難有奉存候夜分にても一讀仕度候先瞥見の所にて如仰海外新話一類とは被存候九州の軍なご目錄にて見候ては餘りに事を略し候様にて只々題號の神風を主とし候様被存迂誕の極と存候事に御座候定て御覽も御座候はむ八幡童蒙訓と申ものは埒もなきものゝ様に候へごも彼時代の實録と被存候けく此書なごよりは當時の警戒とも相成候様に御座候江都墨使への御返

神風遺談

八幡童蒙訓

答等も如何に候やらむ六日對話書などの様子にては大抵その伎倆も推しはかられ候様被存候近日も去る方より江戸來狀寫しと申もの被示候て一覽候所御坊主の話とか申事にて墨使次第に我儘を申候て來春向島の櫻を見候迄滯府候と申候よし少しも長く居り候て國內の虚實人民の風習等迄委しく相探り候心得と被存候然る所此方にては人を外國へ出され候事今に其沙汰無之解すべからざるの極に御座候

外國のうかみはいれてわが國のうかみはやらずいかにせむと

四歳揜幽局。未知悔前失。愁時向東南。非關望月出。

家父近日の作に御座候内々入御覽候うかみは閒諜を日本紀にかく訓じ有之候故用ひ候にて御座候爲念申上候尙新聞御座候はゞ乍御煩瑣御惠示奉願候醫案二道は近夕に右多門可罷出候へば其節不審の條をも相尋ね候上相託し返還仕度留置き申候此段拜復迄申上候以上

念日

多門參り候はゞ今夕か明後夕に致し度明夕は少々故障御座候此義も爲念申

上候

(別箋)

(小宮島は  
宮島嘉織を  
指す)

附白御近邊小宮島丁度炭彦醫案に有之候通昨冬より當九月まで其左眼人を視候ても腰脚は見え候へども頭目は見え不申字を一字視候ても字の下半は見え候て上半は見え不申候よしに付其見えざるは何様にて見え不申候と尋ね候へば只一向に暗く候て見え不申事候其眼中を望み候ては聊か申分無之様に見え申候依て其患を生じ候の因を尋ね候處昨冬嚴寒の節氷上にて顛躓いたし左の顛瀨邊を強く打ち候其以來追々に筒様に相成候と申事にて是も道齋とやらむにも久しくかゝり候よしの所露ばかりも驗無之候故不得已事極密頼度と申事に御座候ひき家父一と工夫有之候とて藥遣し候所服藥を始め候より六日と申に夫迄人の頭目は一向に見えず候所稍頭目を辨する様相成字も上半は昏暗にて見えかね候所乍朦朧其全形見え候様相成候とて大に悦び家父も奇絶と申候事に御座候其以來無油斷服藥の様子に候所近來は倍宜しき趣に相聞え候炭彦の症と但目の左右違ひ候のみ至てよく似寄り候義に付一寸筆の序御話申上

候以上

懼堂先生几下

恪 拜 覆

安政四年十  
二月廿六日

〔七三七〕 山寺源大夫に贈る

小山田孺人  
眼疾

此間は御手簡蒙御存記殊に縊團一盒拜戴感銘之劇奉存候如仰立春に及び以の外の猛寒穩ならざる氣候に御座候乍然昨日來少々は緩み候歟と被存候御體履如何被成御座候や奉窺候然者小山田孺人眼疾の事に付多門被遣不審の廉相尋ね候處猶辨じかね候廉々残り遠近の病因委敷相究め申聞け候様申候事に御座候孺人も散々風邪痰喘の氣味にて問切差支候よしにて其後は今以見え不申候孺人今に快方に至られず候事にや當人修業の大略を承り候所土生一家のみの事にて洋漢混合と申す内洋學は猶其門庭を窺得ず用ひ候藥劑なども果して後世方と申ものなごを用ひ候様子につき眞の西洋實驗の治方を講究候はゞ可然と申聞け候事に御座候過日御問目の内一事御殘し被置候條

英吉利提督某取結び候條約彼政府にては不服の旨左候はゞ其邊より條約修

正を可申出候を無其義戰爭を致し候義を心懸け候逆直ちに品川へ五十艘乗込候趣此末に相見え候は餘り理不盡の致方にて壬寅の冬長崎にて條約を結び候甲斐も無之候如此にてはいつの條約とても兵威に任せ勝手儘に破り候ても不苦風俗にや

是某の亞使申立恐嚇の言多しと目を付け候一廉に御座候西洋諸國兵を動し候にも近來は尤も其辭の曲直を辨じ候事に候へば一度水師提督をも勤め候程のもの差遣しその取結び候條約を政府不服に候とて直に之を破り兵威を以て脅し候事決して致し申まじく又其願筋を成就候はん爲に蒸氣船ばかり五十艘もと申候へば其他の船數は分り不申候へどもいづれ其倍にも餘り可申左候へば總數百五十艘又は二百艘にも及び可申候一艘百人乗とし候ても一萬五千人より二萬人に御座候此一日の費莫大の事に被存候亞人の思ひの儘に相成候丑年以來の本邦の技倆をも委しく存候上にて脅かし候手段ばかりに斯様の不用なる費を致し候はん英國とも存じ不申旁不詰なる申方と存じ候事に御座候是等も疑はしき事とて亞人へ詰問申度廉と存じ候乍去國力兵威敵均候はでは條約

水戸浪人の無智妄動

吉田小林二生の事

は竟に用立不申候様に御座候是は歷代の明鑑も有之識者の確言も御座候事と存じ候依て拙詩にも勢力敵均盟可保威靈偏重和難常とも仕候事に御座候江戸來書寫御示教難有奉謝候寫し濟候間奉返壁候水戸浪人の無智妄動は申に足らざる事に候へども仕途す乍ら召捕に相成候は天幸にてけく此節の無用の用をば成し候歟と被存候聞かせぬ様に致し候て耳に入候事は却て精神によく響き候ものに候へば是等の様子を承り候はゞ向島櫻見物などの念を止め正月の御禮濟には早く下田迄引取り候様相成可申左候はゞ當節の微功をば成し候とも可申候吉田小林二生の事御尋に御座候所一向其後の様子承り不申候小林事は在所へ著し候ては何の咎も無之事とは承り候先は此間の拜復迄草々申上候以上

廿六日

附白年内誠に幾日も無之嘸御忙劇と奉存候賤家は春の來り候はん氣色も無之至て物靜にて讀書講學には絶妙に御座候近日大幅の山水畫望米子藏品のよしにて筆者は操山に御座候内々一題を被望拙作仕候御一咲に供し度録呈

仕候

畫山水歌

門扇深鎖如固圀 一幅江山來何處 狂呼促童掛東廡 對之發興欲冲舉  
羣山岷岫紫翠重 樓居往々蔭長松 江流秀色可攬結 逕路屈曲足遊蹤  
鄙夫平生好籌海 謀忠承譴未須悔 時勢推移不可回 隱憂百端無由解  
畫中老人野鶴姿 莫是仙侶相追隨 我亦願作畫中客 漠然永與世相遺

丁巳臘月聚遠樓題

懼堂先生案下

(別箋)

神風遺談

又申上候神風遺談も難有一讀仕候やはり愚童訓をもこゝかしこ切入れ有之候  
乍去後鑒の緊要と存じ候事はけく略し有之様被存候今朝返壁申上候心得の所  
荆婦一涉仕度相願候間跡より還上申上度奉存候御許諾奉仰候以上

安政四年十二月廿九日

(七三八) 藤岡伊織に贈る

梅溪畫幅の料水の題詞

立春後却て猛寒に御座候御起居彌御平康に御座候歟月迫嘸何かと御多忙に可  
有御座昨日は右之御中歳末之御祝儀品々御惠投被下感謝不盡奉存候然ば過日  
御無心申候梅溪畫幅之料壹方差上申候御落手可被下候山水の題詞も出來居候  
まゝ相附及返壁候是又御檢納被下度候忙中要事のみ草々以上

念九

令愛御氣分御瀉血後いかゞや乍序御様子承度候

獨正賢友几下

大 星 拜

(七三九) 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

安政四年十二月三十日

除日愛度奉存候借先夜は御來訪被下ゆるゝ拜話且美好之一籃預寵貺喜感兼  
集候次第奉多謝候其節御示及之御書取御案文之通差出され候處其後何之沙汰  
も無御座候よし固より左様に可有之候將此程の残り御遣し被下是又奉謝候先  
御返事まで草々以上

八田契丈

大 星

安政四年十  
二月か

〔七四〇〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

御手誨拜見如仰昨日などの寒威は寒中にも無之程の事に御座候ひき然る處倍御安好珍重不過之奉存候賤疾をも御垂問被下奉謝候追々快方候閒幸御放念可被下候儲は被寄思食嗜好之鮮澤山に御惠贈被下不相替御妙製不打置老少團欒賞味可仕と喜躍不啻奉存候乍然毎度之御芳情感謝不盡痛入候御事に御座候家内いづれも宜く御禮申上度段申出候乍憚北堂前御始可然御致謝奉頼候此段草々拜答

即時

猶々御器は是より返上申度候其段御許諾可被下候儲過日之一條に付此閒既に別昏相認め呈し可申と存じ候所水井より也とも話相廻し候はゞいづれにも御沙汰も可有御座と存じ候て又相扣申候御別東の趣にては其御方へも今に何とも無御座候事と被察候かねて過日内書を送り候節此議に於て異論有之候はゞ某方へ内々申越し賜り度又被取用候事に候はゞ水井に云々と申贈

り候事に御座候隨分事柄が事柄にて候故一己にても埒あきかね御勝手方歸著之上極密相謀り候て也發し可申心得にも可有之被察候某方へも只今に何とも沙汰無之候へば某に於ては十の七八好消息と存候事に御座候夫に付候ても一兩日内御歎願書草案致し御目にかけて可申候也

八田賢友

啓 拜

〔七四一〕 八田慎藏に贈る

安政四年か

驅蟲劑

昨夕までに驅蟲劑拵候て上げ候様申候處昨日は俄に取込候事有之乍存御約束に違ひ愧入候此鍊藥即それに御座候唯今より夜分御休み候節までに三度ばかりに御用ひ盡し可被成候明朝より蟲下り候や否委しく御検査被仰下度候にて御用ひ候てよろしく候御用ひ仕舞湯にて器を洗ひ其液迄御用可被成候

煎劑も昨日拜診の所を以て相改め致進上候明日の御様子次第又丸藥上げ可申存候

安政四年か

〔七四二〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

只今既に別昏之通認め人差上候はんと存じ候處へ御墜簡にて御動靜御平康を  
詳にし沃慰之至奉存候小女君御氣體續て御快き趣降心不過之候此間驅蟲劑法  
の如く御用御座候へども只今に蟲下り不申との事左候へば蟲は無之事と被存  
候此間の煉藥はセメンシーナに候故腹中蟲有之候へば必ず下り候ものに御座  
候右用ひ候て下らざるは蟲無之の證にて安心出來申候猶御申分有之候所は別  
に手段可申候御目にかけて置候別條御擲還儘致落手候此後に手に入候もの五枚  
御座候依命差出し申候猶追々入手候はゞ掛御目可申候間今少し早く御返し被  
下候様希候

朔

恪 二 郎

安政四年か

〔七四三〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

争座帖臨書  
の事

好く致快晴候愈御佳勝奉慶候さて昨日は御墜簡争座帖臨書之事被仰下候處折

御示及之研  
ども愚鑿候  
所

高囀の認も

節認もの取掛居御即答に及ばず悚惕之至御座候數枚有之候と存じ候所多分  
蠹蝕いたし是は不出來に候へども全く候間差上申候其儘御留被置不苦候御示  
及之研ども愚鑿候所石質古色とも斧研を以上首とし石は甜瓜硯其次たるべく  
時代は壺研其亞と存候雲龍研は睨とは申定め難く候へども朝鮮物にも可有之  
候いづれも面白きものに候内取わけ斧研は妙品に御座候御愛玩可被成候將高  
囀の認もの昨日風と興に乗じ揮灑候に付研共返璧之序差出申候御一咲可被下  
候匾字並に國風を認め候絹は残り多く有之候何ぞ認め候て宜く候はゞ無御遠  
慮御申越し可被成候昨日不及御即答申譯旁如此御座候已上  
墨三枚是又致完璧候御査入可被下候

二日

大 星 拜

澹庵令友几下

〔七四四〕 竹村金吾に贈る

長野市 小林暢氏藏

安政四年か

前夜は御枉趾を蒙り久々にて拜面多々獲金誨感喜之至奉存候殊に公事を以て

(八愼は八田愼藏)

蒙御尋候と申に品々嘉賜を荷ひ何共恐入候次第拜謝の申上べきやうも無御座唯感泐のみ罷在候家内のものいづれも宜しく御禮申上度段申出候借は八愼御内借取片付一條も御妙策御書立蒙御示及候に付極密早速に相示し候所段々一方ならず御配慮被成下種々御趣法立も被成下候義深く奉感佩候趣にてさて申聞候には家財其外等も中々此御積りの金高に至り不申當惑之義詳に御書立浮籤に申上候且二十年ならずして取復し候御勘定には候へども三十年を一世とやらんも申候處其半世以上の義に御座候へば此節の世の中何様の事出来候はんも難計且私家にも何等の事あるまじきにも無之又御重役方御役頭にも夫まで屹と御別條無之とも申難く既に近年厘かの間にも種々御變革も御座候次第にて何事も其時に當りて御出かけ御座候御仁の御了簡次第と申様の者に候へば此御書立通り此節御定被成下候ても他日に至り其御規定通不相成候事も難計たごひ左候連も上と下の義に付仕べき様無御座萬一左様の義に至り候節には先祖より御厚恩を以て相傳仕候元株を私代に失ひ候義に付何共氣遣はしく忍びざる筋に有之候と申候に就き小弟申候は御役人にて聡と上意を伺ひ取極め候筋幾多

の御役人を經候とも何しに違變有之候はん其所は安心候て此異見に就き暫時の艱苦を忍び候て後榮を子孫に貽し候方良策に可有之尙書の藥瞑眩せずんば其疾瘳すと申も是なるべしと申候所愼藏申候に御役人にて上意を伺ひ御取極め御座候事にてても大いなる御違變の義御座候事私家には慥なる證據御座候と申候に付夫は如何なる筋と尋ね候に愼藏申聞け候は私五世の祖を孫左衛門と申候此者私家の始祖にて只今の喜兵衛家より別家仕候ものに御座候所實永年中より才覺金調達被仰付段々御用向出精相勤候に付享保年中三十人御扶持被下置候二代目嘉助義も前代同様度々才覺金被仰付御用相勤候所其頃は御上にてても御勝手向殊の外御逼迫にて調達仕候金子御返濟不被成下寛延三年かに御尋有之御元利御滯之分相調べ候所金子八萬兩餘糶子四十万表と申事御座候然る所金高莫大の義に付御斷被仰出其以來は調達金急と御皆濟可被成下に付才覺金差上候様改て被仰付御用相勤候所其以來の金子は追々御返濟被成下候へども嘉助代莫大の御滯金御斷被仰出候に付御増被成下置候二十人御扶持は其倅孫左衛門家督之節より不被下置候此孫左衛門義は祖父嘉右衛門親にて私に



は曾祖父に御座候又右二代目嘉助初代に古金八百兩餘粃二千表餘享保十三年かに才覺奉差上候所其口も年來御元利とも滞り候て寛保元年に至り所持の田地御年貢にて年々貳百九十五表宛御渡可被成下旨御書付頂戴仕候所是又孫左衛門家督被仰付候後より御斷にて不被下置候只今右古金等才覺仕候節の御證文相殘居候所いづれも御郡奉行連印にてしかも御重役方末書其内には信弘公御裏書のものも御座候て間違ひ候ては濟ぬものに候へども形の如き次第に候へば他日之義は實に氣遣はれ候義と申候に付小弟も打驚き候て右様の事初て今日承候實に先代多分の御用をも相勤莫大之御滞金も有之御違約の事なごも御座候はゞ何故是迄話しも無之候や果して其話の通に候へば此節御内借元利六千に及び候とても幾重にも御仁計の歎願仕方も可有之如此大功も有之候家の事に候へば御家中一統の拜借等へ御引競べ彼是可有御座筋は勿論有之間敷いづれにも一と考致し見可申候とて當人をば先歸し候義に御座候右慎藏申聞け候義は兼て御承知の御事に御座候哉小弟義は此度始めて致承知候義に御座候既に此事相違も無之事に御座候はゞ此節之御内借追々相嵩み候と雖も先年

の御滞金に比し候へば多寡猶懸絶も仕候義に御座候左候へば當節御上にてても御逼迫之御中には御座候へども何と格別之御仁惠被成下度奉存候勿論先年之義は先年之義詰り其義を以て彼是可奉願等の横行なる計策を以て御内借仕候義には無御座祖父嘉右衛門末年より嘉助一代不回りの事のみ打續き遂に遂に此極に至り候に相違も無御座實に懲察に堪えざる義に御座候其上此極に至り候ても猶其先代御用達金滞御座候事等かね々懇意に仕何もかも打明け話も仕候小弟にさへ是迄に遂に不申聞此度前段之語脈を以て漸其事に及び候にても慎藏忠厚之志は能く分り候義と小弟に於ては深く感じ入候事と奉存候實に右等之莫大の御下金滞に相成居候義に御座候はゞ此節御上にも以前御勝手御不如意にて其義に至り候所思召被爲出御破格の御仁惠被成下度御事と乍憚奉存候左様も被成下候はゞ元々株も御座候義に就き追々勝手も取復し可申勝手取復し候上は此度御仁惠を奉蒙候所子々孫々永く奉拜戴又々先代の如く御用相勤め御上の御爲筋に可相成義も可有御座奉存候免に角君臣一體之義に付御上御不如意の節は御下に罷在候もの力を盡し御不足を奉補又御下に罷在候

ものひしと難澁仕一家傾覆の際にも至り候はんと申時には御不便を被爲加御救ひ被遣候は御當然の御事と奉存候乍然其間には御法と申ものも有之御家中御領分一統の義御偏依なく御畫一に可有御座は勿論に御座候へども御先代斯ばかりの大金御用達御下金莫大の御滯も御座候ものゝ子孫の義に付外に類も有御座まじく左候へば御破格の御仁恵被成下候とても御畫一の御法に相碍候義は有御座間敷奉存候右に付愚意竊に奉存候には責て御趣法御書立の内御扶持方御移替の義とても戴き罷在候御扶持の内御移替千兩に相成候丈差上其千兩壹割の利分にて御預け奉願只今御内借元利六千兩御禮金御免六十ヶ年賦に被成尤も年限相濟候所にて御扶持方本の如く被下置候様位には被成下可然御事歟と奉存候先祖の義を以て筒様にも被成下候はゞ當人は不及申萬世難有仕合に可奉存候先代形の如く御上に御徳分を奉附置候義に御座候へば筒様被成下候とても御上に於て御溢恩と申上候程の事にも有御座まじく奉存候猶平たく申上候へば此節酒造の方さへ年々仕入金に差詰り借入候ては造込も仕候程の手詰に

罷在候所蒙御憐察先代御用達金莫大の御滯御斷に相成候節其莫大の御滯替被下置候御扶持方並に年貢粃等其以來御引上に相成居候等の義被思召此節の御内借の分其儘被下切に被成下候ても可然御事又は勝手取復し候節まで御取延に被成下候ても御尤の御事と奉存候先代才覺金夫程莫大に御座候をば一向に御斷に相成其十分が一にも滿ざる近來の拜借滯のみは厳しく御取立て御趣法とは申ながら暫にても先代より相傳の屋敷等手離し候様に御座候ては其以來御上にも御聯綿と御相續被遊御座慎藏家にも聯綿と是迄相續罷在候所にてはちと御不道理に相當り可申と奉存候先生にも御迷惑の場に御出くはせ被成御俯仰の際御難澁に可被思召段は實に奉察候義殊に只今の御役被蒙仰候以來御承知にて御内借被仰付候分も多々可有御座候へば別して御迷惑は申迄も無御座候へ共其節には筒様の仕議に至り候はんとも本より不被思召又先代御用金莫大の御滯に相成居候等も其頃には御承知も有御座まじく只其一時上下御融通の爲のみに御取計御座候義にて可有御座候へば聊か誰ありて御非難も申上間敷奉存候然るをもし先代は先代の義其節の御役人取計候義に付御存知無之

當時御自身御取扱御座候義のみは是非共嚴重に御取立無御座候ては不叶と申義にては輕き小吏などの上には免も角も重き御役方等に於てはあるべき事も存じ候はずいづれにも慎藏語次申聞候義咥と御取調御座候て果して彼家にて申候所に相違も無御座候はゞ夫丈の御仁惠被成下候様御周旋且御廻護の程奉萬冀候左様も被成下候はゞ彼家永く御厚德を奉欽仰忘却の期有御座まじく奉存候宜しく御勘辨可被成下候此程の御一紙寫し留則返上仕候以上

二日

大 星拜

竹村先生臺下

松代町 八田彦次郎氏藏

(別紙)

別紙申上候八慎一條に付本書相認候處實意外之事共且容易ならざる義に付萬一齟齬仕候義等御座候ては段々深く御配慮も被成下候所に對し奉り候ても懼入候義に就き爲念傳來之書類共取寄せ覆詳仕候處慎藏申聞け候次第に聊か相違の筋無御座候何分も一と御勘辨被成下申上候義道理に當らず御取用に相成かね候義に御座候はゞ極密此本書へ直に御批抹被成下大藏に御附し被成下度

(本紙と別紙離れん所となり現在所有者を異にせり)  
傳來の書類共取寄せ覆詳仕候處

又申上候義御采納御勘辨被成下方も御座候はゞ水忠は慎藏縁家のよしにも御座候へば是へ也御内意被成下可然歎願書にても御差出させ可被成下もの歎總て奉任高意候以上

(七四五) 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

安政四年か

今日は冷風に御座候何之御恙も無御座候哉娘様彌御快方に候歎御左右承度候然ば御話しの王振鵬沈度之書畫冊拜見申度此もの差出し候御惠示被下候はゞ千萬可辱候將過日高囑之拙書ども差出し候節此便面取落し今日迄不心付折節心づき候まゝ序に差上申候以上

廿三日

子 靜賢友

大 星拜

(七四六) 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

安政四年か

昨日の御答書にて御近況詳悉且令愛御不快も次第に御善候と承り喜慰不過之

書簡 聚遠樓時代 (七四五)(七四六) 八田慎藏宛

六七七

王振鵬沈度の書畫冊

王振鵬の落款は後人の所爲に沈度楊子奇は殊に贋託

候然ば御惠示を冀ひ候畫冊早速賤伴に御附し被下得諦觀一時目を悦ばしめ淺からず辱不勝銘謝候畫は随分面白く必ず明末清初の良工なるべく候但王振鵬の落款は後人の所爲に出候様存候沈度楊子奇は殊に贋託に有之候へども第一の畫頗る精巧に候へば御襲藏尤も可然候鐵網珊瑚消夏錄等にも跋尾贋鼎可啖と申品多く見え申候彼邦にても此類少なからずと存候折角と拜見候故に愚管無伏藏得貴意申候畫冊納去御檢接可被下候餘留面賦

廿四日

澹庵賢兄

大 星 拜

安政四年か

〔七四七〕 山寺源大夫に贈る

箱館にて夷人亂妨

此間は態々御誨答難有拜見仕候去月中より少々御勝不被成乍然御加養にて近來は次第に御復常御座候よし先以奉降心候雖然此不揃之氣候千萬御保慎に不可過奉存候儲又江戸表より御到來之別條數通拜借相願候所蒙御許允乍例奉感銘候此趣にては箱館にて夷人亂妨之事も虚説には無之候ひきいかに無人に候

本邦の防海は唐山とは格別にしては賊の死命を海外に制し

思綺堂集

往年家父八代洲河岸に罷在候頃

へばとて市中の人家の物を奪ひ戸障子打こはし候を其儘に差置候と申も國威を失ひ候の限り去りてなまじゐに制しだて致し候はゞ彼の謀に陥り戦争の階と成り可申此時に當て奉行たるもの難矣哉と存じ候事に御座候兔に角家父のかねて見込候通本邦の防海は唐山とは格別にていづれにも盛に礮艦の術を講じ賊の死命を海外に制し候程に無之候ては叶ひ難き事と奉存候然る所廟廊にも其下にも此一著に眞眼を被開候人一人も無之候と申は痛大哭の外無御座候別條寫し留候閒返壁仕候御書入可被成下候思綺堂集標題正氣堂と有之候故に態々浪華より御取寄被成候所愈大猷の集に無之御失望のよし乍去四六の手に際宜しく且自注と申處面白き様に被思召蒙御示及難有一兩卷讀過仕候所高見の通一種の才子と被存候往年家父八代洲河岸に罷在候頃樓藏本の林蕙堂集一讀候處丁度此様のものにてけく艶麗は是に過ぎ可申よしに御座候いづれも文章の正路に無之彼方にては四六も時ありて是非なく入用之事も候へども此方に於ては先入用も遠き事其上此時節虚文之爲に日月を費し候はむは務めを知らずとも可申候へば先是等は御不用に被遊候方可然やと家父は奉存候趣に

御座候

宋學士集

宋學士集の事も被仰下候所寛々御留置かれ何の妨も無御座候彼書の裏打に綱鑑類に相應の力量のもの、書入御座候本を崩し入れ置候をばいつぞ別の帛を入れ替へ後輩讀史の節書入にても致し候手本にも致し申度と存じ居候所本に依り糊を強く用ひ候が有之早速の事に埒あきかね候故閑を得候はゞ脱葉をも補ひ錯簡をも正し候はんなど存じ其節の事と數年打捨置き候處此節に至り候ては別して専ら取掛り居候課業も有之彼集に手入致し候隙も更に無之候間先其儘に御手許に可被差置下候さて又越の府中産にて精製之海膽御分惠被成下珍感極て深く奉銘謝候能々御禮申上候様申付候思綺堂二帙も則返上仕候心謝心謝餘待面盡

廿四日

山寺老先生 几下

恪 再拜

(別紙)

正氣堂集箋注

此書標題に正氣堂集箋注と有之候は全く彼土製本の所にて風と間違候事と被

察候恐らくはこの思綺堂章氏愈大猷が正氣堂集の箋注を著はし候事可有之夫故に傍に思綺堂章藻功原本と有之候かと被存候其思綺堂の文字有之候より遂誤り候て章氏が自注の思綺堂集に其題簽を張付け其題簽よりして其實思綺堂集なることを究めず帙の上にも正氣堂文集箋と題し候ものにも可有之乍倉卒愚考申上候

安政四年か

(七四八) 山寺源大夫に贈る

泰山青帝宮の碑刻

昨今霽色には相成候へ共冷氣に過ぎ申候闔府何の御障も無御座候歟奉伺候然ば例の泰山青帝宮の碑刻漫漶の所有之又磨滅無之所と雖もいかにも狂怪にて讀みかね候字句多く候先左の通まで杜撰仕候尙此上の尊考相伺度奉企望候  
丁巳歲九月、與諸君同登泰山二首

大虚茫茫都是天、泰山一登小天下、日中見斗天末遠、山下回首斗斜挂、齊魯何人□  
□□功德□事開圖畫、上界到了上天門、□下□□欲羽化、  
仙□□州□□、瀏紺宇絳接大虚、上世變遷還此嶽、乾坤俯仰獨吾區、東海日從地中

出、山頂人在天上居、秦漢封壇盡草莽、相傳空有玉函書、

孟河 □ □

王之綱が跋の趣にては孟河の詩を念覺の筆し候ものと被存候は不明前詩韻脚  
間違ひ居候可怪事に存候挂畫化は韻別にても同じく去聲にて候へば通じて用  
ひ候にも致せ元來天下の下は上聲にて下と申時に無之候ては去聲には成り不  
申候を此所に用ひ候は誤用と被存候何の例の有之候て致し候ものか見覺え不  
申候是考を希ひ候

安政四年か

〔七四九〕 山寺源大夫に贈る

昨日の一書は差上置の心得に御座候所縷々御懇到之御誨答乍例奉感銘候昨日  
は少々御不例に被成御座候よし乍去晚來早速御快然と申御事先以奉降心候 □  
□時候甚だ宜しからず候千萬御保重に不可過奉存候昨便御承知御座候には房  
州邊又々異船渡來の趣偕々多事なる義と奉存候尙委敷事共相分り候はゞ内々  
御聞せ可被成下候將今様の詞集め候もの刻本候や又寫本のみか何れ所藏候は

俗筆の譜

ば奉貸候様被仰下候所いづれも所持仕らず御用立かね候但し俗筆の譜と申も  
の残らず今様に御座候故一絃琴など弾じ候ものは箏譜中より詞の可なるを選  
び候て歌ひ候様に御座候近世熊澤蕃山が作りし一二首候へども詞體鄙俗に有  
之俗筆譜中のもの遙かに増り候様聞え申候免に角 □ □ 平家物語に御座候が  
絶調と被存候事に御座候先拜酬迄草々申上候風呂敷御擲還慥かに奉落手候以  
上

廿四日

星 拜覆

山 寺 君 臺下

安政五年正  
月十四日

〔七五〇〕 山寺源大夫に贈る

御手字拜見如仰頻々之春雪寒氣殊に猛烈に御座候所倍御安健にいらせられ沃  
慰之至奉存候此閒御惠賜之御移有合の粗品奉獻候所御丁寧蒙仰悚惕之仕合に  
奉存候偕又舊臘の別條四分一御手に入御謄寫被爲濟候て速に御示及被成下乍  
例奉感刻候一兩日拜借仕度候將高野生の詩二首御示し是又奉謝候然る所燕の

(高野生は  
高野廣馬を)

書簡 聚遠樓時代 (七五〇) 山寺源大夫宛

六八三

指す)

詩も命意新ならず且第二句聞え不申孟子に出典も候へば茅塞に候はゞ忽の字  
 きゞ可申候へども馬蹄車轍に茅を生ずるに忽の字は當り不申欲の字に替へ候  
 はゞ少し聞よく相成可申相考候後首驚騰の字も目を刺し申候其上落句面白か  
 らぬ趣向と存候兔角絶句は倉卒に致し易きものに付精鍊も行届きかね候もの  
 に付此等の一二首を以ては其技倆も藻鑿し難く候何か長篇の詩又は序記説類  
 にても掛御目候はゞ御示し奉希候歸省もたまさかにて故友へ示し候詩文に候  
 はゞ疵瑕無之を擇み示し可申所左様參らず候は怪しみ存候事又是等の詩を自  
 分にて少しく出來候心得にてはちとかねの望を失ひ申候渠も家父舊門人  
 の義に付何卒一等地を出で候様にと竊に祈り居り候所技倆を極め候て此位の  
 事にては大に失望の事に候趣もし歸府前拜謁も申上候はゞ何となく此意を以  
 て御激被成下候様仕度と申事に御座候御新製篇々警拔且時弊にも切當深く奉  
 敬嘆候毎度御下問に付一二點を申上候宜しく御取舍奉冀候此段草々奉復

十四日

懼堂先生臺下

恪二郎拜

渠も家父舊門人

安政五年正月十五日か

〔七五二〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

御手帖拜見春寒愈御佳勝と承り慰傾想候然ば御内話の次第も御談事方御行届  
 きと申御事珍重に御座候右に付大藏方の義に付て御相譚有御座度關田一同後  
 刻御入來の義差支有無御尋被仰遣入御念候御事に候然る所明朝立鍵屋莊之助  
 參宮京師へも廻り候よしに付彼邊内々相尋度方も候て認ものに取かゝり居候  
 其所へ過刻も數輩來人大に手閒を費し迷惑に存じ候所に御座候御差掛りの事  
 に候はゞ兔も角も宜く候へども今日に限らず候て子細無之御都合に候はゞ明  
 日に被成被下度冀ひ候此段拜答迄草々以上

十五日

御追書之趣辱奉存候もし浪華に袖化丹青等の細筆の可也なるが有之候はゞ  
 一二十枝御調被下度希候

澹庵契友

大 星 拜

袖化丹青等の細筆

安政五年正月十六日

〔七五二〕 山寺源大夫に贈る

痛哭流涕の極

今日は大に緩かに御座候倍御健安と奉想像候然ば一昨日は不相替別條蒙御惠示奉感謝候一覽仕候處貿易之義もミニストル被差置候義も悉く御一使申立通御聞届に相成但開港場所の事のみ少しく御拒御座候様に候へども是又是迄の御手振を以てトし候へば十に九迄は遂に彼れの申に御隨順可有御座と存痛哭流涕の極に奉存候此御運びに相成候所にてはもはや如何様の智者出で來り候とも取返しに難相成勢誠に不及是非次第奉存候但此所にて猶少しく望を屬し罷在候は天朝の御様子に御座候今上也兼て御英明の御聞えもいらせられ攝家の御内にも御有力の御方も被成御座候歟に仄かに承り其上中山殿と申方格別豪傑にて既に千草三位なども毎々御賞美御座候よし右之御様子に候へばけく縉紳間にはよく事務に達せられ候御方も可有御座候左候へば舊冬江戸を御使も相立候所すらくと江府にて被思召候様には京師の御様子參るまじき様にも被存候其上に猶薄々風聞候趣にては此度の御處置大分國主方にて御不平の

今上也兼て御英明の御聞え

參勤御訴訟など御座候御方

事御座候歟にて參勤御訴訟など御座候御方も御座候とか申事いづれにも危険の御時節と奉恐懼候義に御座候右に付候ては當今差向き天朝の御様子并に此度御一使申立て一條公邊御應接向等の事京師にて如何致評判候や又縉紳家に於何等の議論有之候や勅答等は如何に候ひしや又一面如此にて内邊別に容慮も被爲入候御儀や是等は容易に窺ひ知るべき事には無之候へども何分も竊に相探り心得居度ものと奉存候御國家の上にも甚御急務の様相考候高意には如何被思召候や此義一二門下の内にも深く致心配候事に託し西遊候上星巖は元來時事にも心を御用ひ候老人の事に就き是なごへ便り承り繕ひ候はゞ同人頗る縉紳家へも立入候事故知り得べき程の事は相分り可申と奉存候此義如何可有御座候や委細は此人の口頭にも可有御座候右に付候ては相願度事件も御座候この事孰にも當今の要務とも奉存候宜く御勘考奉冀候已上

星巖は元來時事にも心を御用ひ候老人の事に就き此義如何可有御座候や

十六日認

大星再拜

懼堂老盟臺 臺下

附啓本文不容易事共に付禁例を破り如此に御座候御電覽後速に丙丁に御附

本文不容易事共



し可被下候至禱

安政五年正月十八日か

〔七五三〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

昨日御約束申候一通認め候閒封じ候はず持せ懸御目候何か思食も候はゞ妨げず被仰下度いか様も改め可申候また是にて思食もなく候はゞ一寸御封糊を御施し關田に御附し可被下候以上

十八日

八田賢契

大 星拜

安政五年正月廿一日

〔七五四〕 山寺源大夫に贈る

當今五大洲の形勢をも明に御觀察被成

拜見仕候如仰又々春寒凌にくゝ覺候倍御健安被爲入奉敬慶候然ば一昨日拜問申上候義多分相違に有御座まじく候とて御別紙蒙御惠示乍例難有奉謝候九條殿下御様子格別の御人物に被爲入候て三九など既に已に申上も致し候筈の様奉存候果して當今五大洲の形勢をも明に御觀察被成御座江府是迄の御所置一

(川岩二君は川路聖謨岩瀬修理)

(菅鉞は門弟菅鉞太郎)

一其是非を御辨明御座候ての御事に候へば此度堀田侯御始め川岩二君にも餘程御心配の御事と奉察候乍去京師邊此節人に乏しき所にてはいか程明敏の御方御座候ても又御行届き被成かね候所多く可有之被存候右等の上に付候ても誰ぞ睨と致し候者上京探索の義被仰付候て可然奉存候菅鉞など如何可有之哉存出候まゝ極密申上候伊藤面疔の事御別紙のみ一目案立不申いづれ西洋家の聞え候ものへ託し候方可然候戸塚静海林洞海など可宜候此義被仰遣候はゞ可然候先草々拜答申上候別紙任命直に返璧仕候毎度御多忙の御中異聞早速に御垂示被成下御禮可申盡様無御座候以上

廿一日

恪 拜復

懼堂先生三席

安政五年正月廿六日

〔七五五〕 梁川星巖に贈る

東京市 宮本仲氏藏(草稿)

打絶御音問も仕らず候事厳しき法禁の係る所不及是非候次第定て御原鑒も可被下候然る所此度右之禁令を破て極密呈書候子細は追々世上致傳播候客冬亞

皇國の御大事爰に迫り候様奉存  
一日性命を  
保續し候も  
則國恩と奉  
存

人江府參著登城已來の次第定而御地にても委細御傳聲可被成其義に就ての事に御座候夷患年を追て致漫衍殆ど以膚の勢に相成皇國の御大事爰に迫り候様奉存乍恐兼々杞憂を懷き罷在候天朝の御安危にも拘り可申形勢獨り徳川家御一代の御災患のみに無之御座と被存候へば當時禁錮の身には候へども一日性命を保續し候も則國恩と奉存此御時節聊か天下に裨益も可有御座と致料見候義有之候を無下に黙し罷在候は國家の洪恩に奉背候義と致覺悟當十五日別紙第一號之通親戚の者を以て重役共迄差出し候所數日之後志之程尤の事に候へども當節の場難相成旨を以て右書面被差戻候是又不及是非次第に御座候嗣又傳聞候は林家御使を被命舊臘十四日發軔にて上京の所這々の體にて歸府有之京師へは堀田閣老被爲召川路司農も一同發駕と申事於是竊に喜び奉存候天日未だ地に墜ちず兼々僻遠に罷在候某輩もかけまくもかしこき御上の御事は奉申上候にも及ばず殿下の御明敏并中山卿の御俊拔等耳に轟き罷在候所果して此御時節其奇特も相顯れ候様被存難有義に奉存候竊に愚察仕候に林家御使にて不相濟閣老被爲召候御事は定而舊臘二日堀田侯の第に於て亞人と應接有之

堀田閣老被  
爲召

第一天朝へ  
奏開を被爲  
遂然る後御  
處置無御座  
候ては

一時は一言  
もなく申伏  
候様無之候  
難立義

其第三條ミニストル差置き候を御聞届に相成候義と被相察候此ミニストル一段の事は某には最初亞人申立の次第傳覽候節既に愚意存候は普天の下王土にあらざる事なく率土の濱王臣にあらざることなしと申候に亞人の申候に據り候へばミニストル被差置候構の内は自國同様に致し日本官府の制度を受けざる趣相見え候左候へば邦域の内にして王土にあらず王臣にあらざるもの有之候義に付開闢以來の大變とも可申左候へばたとひ當今の時勢已むことを得ざる御筋合御座候とも第一天朝へ奏開を被爲遂然る後御處置無御座候ては濟ませられまじき義と奉存候其上愚管には亞人申立の次第恐嚇欺瞞多く罅漏致百出候事どもに候へば能く其辭命を脩めて其非を詰難したとひ勢力の敵均せず候より異日御許容に可相成義に候とも不筋の次第は是非一時は一言もなく申伏候様無之候ては御國體難立義と奉存候春秋の際に當て鄭の小國を以て晉楚の間に介し其兵禍を受け候事殆ど虚歳なく候ひしを子産政を執り候に及て辭命にあらざれば此患を免かれがたきを知り裨諶子大叔子羽等の名士を選出し艸削討論修飾の功を加へ更に自らもこれに潤色を施し諸侯賓客交通の間に用

膽略無之候  
ては埒明き  
不申

ひ候故に毎に敗事あることなく定獻襄三公を合せて五十餘年の開兵禍を免れ社稷人民これに頼て保全を得候事全く辭命の功と存候事に御座候乍去其辭命を行ひ候にも膽略無之候ては埒明き不申平丘の盟に子産承貢賦の次を争ひ日中より昏暮に至り候も富文忠契丹に使用して盛策を以て獻納の二字を却け候も此膽略と存じ候事に御座候

某此局に當  
り候はゞ箇  
様にも申談  
じ度

當今亞人應接の御役人衆には是等樞要の事聊か御念慮に及ばれざる事と竊に致歎息試みに某此局に當り候はゞ箇様にも申談じ度第二號の如く草し見候事も有之候最初江戶御主宰にて此所に思召御座候はゞ天朝への御政體も被爲届御國體も相立且亞人の膽を破り候義に付後々御取扱にもいか計被遊よき御事可有之と存候事に候所辭命等聊か御心にかげられず開闢已來天下の大變革に係り候義を天朝へ被仰上候はでは乍恐大義に於て難被爲濟御筋に奉存候大學殿這々の體にて歸府と申取沙汰を以て想像候へば天朝にも必らず右の大義を被仰出殊に大學殿儒者の家に候へば大に恥をかゞやかされ候義にも可有御座奉存候然る處思念爰に及び竊に又憂懼奉危候義は

此以下此度禁を破て及呈書候主意の有之所に御座候其

堀田侯の如  
き儘かなる  
御人物を被  
失候ては

當今有數の  
御方

思召にて御熟覽可被下候 此大義を以て御不審被仰出候時には堀田侯に於て決して御申開き御出來かね候義と奉存候其御申開き迎も御出來かね被成候時は候には御身を以て其罪を被贖候外有御座まじく被存候然る處自然右様之義に至り候時は天朝御威稜の嚴霜烈日たるが如くなるは去る御事に候へども當今江府にも御人に乏しき上外夷猖獗の時節堀田侯の如き儘かなる御人物を被失候ては差向き御國の御弱みに相成り候者御損失亦甚しく候義と奉存候堀田侯には兼て文武に御志深く御政事も宜しく御領國人民御撫育もよく御行届き防海の事にも厚く御心を用られ候事一朝の義に無之年久しく御苦勞御座候事慥かに承知候筋も候て能く存知罷在候然る所揆らず此度の議出來り候事甚惜み奉存候義に御座候隨分當今有數の御方に御相違なく候へども何を申も其下に屬せられ候御役人傑出の人無之たまゝ更才有之候ても將才之なく和漢の事は稍知られ候ても西洋の學に疎く邦國の利病をば心得候ても五大洲の大利害には通せられずと申様にて當今世界を總括し大經濟に通達の仁無御座候故に建議討論も多く皆故常に拘泥し候事のみにて候の御志を賛成するに足らざるの所致とも

ペートルの規模の如く

相察し是等の義某輩申出候は憚多き義に御座候へ共竊に念願仕候は此度天朝にて被仰出候御大義にて其上の所は時節柄格別の御仁典を以て候の御不調法の廉被爲宥此以後の功を以て可被贖候様被仰出是迄の如き苟且の御故轍をば幡然と御改めに相成總て魯西亞のペートルの規模の如く廣く人を選で外國へ出し其長する所の諸術を學ばせ方に其形勢時情を探索し又多く外國の名士を招引し襟胸を披て御優待有之本邦になき所の藝術の師として盛に諸學科を興し城制を變じ遊民を禁じ刑罰を省き器械學を盛にし工場を開き大艦を多くし航海商法を復し此方に官府の制度を受けざるミニストル置候ならば此方も彼地に彼の制度を請けざる官吏を置き行々外地の貢賦御府庫に收り御國力の實に英佛彌利堅にも被爲過候様年月を期して被爲行届候様の御處置に相成候様仕度ものと奉存候是等の大經濟責ては堀田侯にても無御座候ては其任に勝へられまじく乍去又堀田侯にても御再勤已來やはり故常に牽かれ衆議に因られ當今第一の急務たる□□の事を始めて□格別の御雄略と被存候義一事も無御座候へば此處にては天朝の御威勢を戴かれ候に無御座候ては逆も十分御

行届き無覺束被存候

當今遠大之御國是も

雖然堀田侯も慥に去る御方に候へば天朝の御威勢をだに御奉戴御座候て故常苟且の舊弊を被破候はゞ當今遠大之御國是も相定り候様隨分御行届可被成左候はゞ所謂敗を轉じて功と成し禍を化して福と爲すの御機關乍恐天朝此度の御一舉に御座候様奉存候然らざれば時節柄差向容易ならざる天下の御損失可有御座奉存候彼是の義此節先生を御建策には相成まじきか追々傳聞候へば御在京以來縉紳家より御招待被申候も一方ならず候よしに候へば九條殿下を奉始中山卿等へも必らず御手寄も可有御座兼てより時事には毎々御苦勞も被成候御事に付御老境に御入候ても其段は往時に御替りは有御座まじく此度の義も追々御傳聞さぞく御感憤に被堪間敷と推察仕候就而者某存寄之次第も極密申上候何とか當今の御補ひに可相成様御密策も可有御座奉存候に付態々此者を走らせ此呈書に及び候義に御座候是聊國に報するの微忠と奉存候宜く御照亮可被下候もはや堀田閣老にも御京著にも可相成候へども何とぞ可相成は火速に回天の御一策奉切望候時期後れ候ては詮なき事に成行候間吳々も可然

時事には毎被御苦勞も御事被成候御事

國に報するの微忠

奉希候將又申上候迄も無之候へども此度の呈書固より禁を破ての義に付其人にあらず候はゞ決して御漏泄被下まじく書生には別して御用心可被下候癸丑の上書并に甲寅獄中擬上書草稿御心控に可相成義も可有御座と存候閒手昏の儘密に掛御目候是は此外に稿本無御座候へば御一涉後直に賤价へ御附還被下度奉希候舊臘并今春の拙詩録往奉乞正候詩中に相見え候洪範解には國語を以相認候初申上候閣老へ上書の義相叶候へば差出候はんと心組候ものに御座候此度密に□奉□も仕度候へども紙數も多く寫手も差支第一差向候義急々故に不能其義候追て可奉供電囑候國風は昨年の作に御座候御流義違に候へども備御一咲候是は縉紳家之盛評をも得度ものと奉存候書不盡言惟々天下之御爲一と御苦勞被下候様奉企望候外他事無御座候頓首

正月廿六日

省讐録抄

是も祕物に候へども子弟抄出致し置候が有之候まゝ何ぞの御心控にこそ亦掛御目候是は猥に御他見だに不被下候はゞ其儘御留置かれ候ても外に稿本

有之候閒不相妨候也

星巖より返事

安政五年二月二十四日發

鴻信飛來忙手拜讀先以起居萬福奉賀候久潤之段山妻と共時々御噲申上候御引籠中定而時事感激可被成奉察候老拙事も閉戸讀書耳乍然京師は八達の地に付九州四國及往來の人士立寄候節諸方風聞承り有志の者往々有之候へ共有用奇特の人物は少く候此度御門生被遣候に付て堀田侯之仰上朝議も委敷相認差上度候へ共今以て決定の處分り兼候昨日も參内之趣如何に候哉御門生滯留數日に相成定て御待兼と存じあらましの處を認餘は御門生に話置候老拙六七日前より腹痛大に起り絶食聲中に罷在何共不自由にて困入候へ共叩門來客不絶京師には一向無人池内大學なるものは智恩院宮の御内にて老拙江府留寓中に時々參り候者定て御一面も可有哉覺候此者京師にて致開業公卿の教授に日夜奔走頗る有志にて殿下大閣三條中山に出入青蓮院宮へは月に六回進講仕候此度は上下四方無所遺周旋竭力候に付老拙も得氣候其外兩三輩も可有之哉何分にも朝議一決仰出有之承り次第に可申上候一往御門生御引取可然申候談置候處御聞可被下候時下爲國御自重奉祈候草々頓首

池内大學

二月二十四日

像 山 老 盟 臺 下

(別紙)

大闇の權威  
實に傾朝

諸公卿の門  
入へ猥りに  
禁じ

客冬林家上京の主意は兼てより京都公卿承知致し被居候處に先つ大闇及臣下へ賄賂等大分に行ひ候殿下へは却て物事後に相成候殿下と大闇とは何分にも争權の意從來有之大闇の權威實に傾朝候事年久に付宮中女官等も皆々大闇に歸し罷在候主上の思召も兎角大闇女官之塞ぎ候て言路不通此度は兩度迄殿下へ詔書下り東府より賄賂等持參候とも不拘大小官に不許受一錢表向獻上等は返禮の賜を被遣候の趣也其餘諸公卿の門へ猥りに出入を禁じ不許私謁右に付此度堀田侯及川路諸役人手揃にて上京なれ共諸人共に伎倆窮り候扱於東府堀田侯より夷人へ私に御免許之儀朝議下り候ては堀田侯無容身地此一件は何分に少々寛め御取計被下候様に相成候趣也參内相濟後一日傳奏兩人本能寺へ臨し候此日俄かに議奏五人共に來臨に付堀田侯も當惑の由傳奏衆兩人は當世風の人物にて大闇之黨也議奏衆五人の内にて久我徳大寺萬里小路皆々強々たり就中久我大納言殿は大有氣魄先年禁裏御延燒の節も第一番に參内次に轉法輪八條の兩卿供奉にて急々御避に相成候中山殿も

粟田青蓮院  
宮天養英邁

老兄よりの  
書翰は内々  
置下へ差上  
置候

屈強の人物に候此度の一件は參議以上法親王方に到迄不遺一人皆一書有之候東府の了簡とは盡相違致候趣法親王中にては粟田青蓮院宮天養英邁主上へ親近有之右に付言路大に通じ候平日は俗官共風狂親王と稱し居候處此節は大に畏入候由主上は叡明にて數年來洋夷一件も御承知時々詔有之候へ共大闇女官等申上候には萬機盡く東府將軍へ御托し有之彼方闇老諸人日夜商議仕り罷在候に付不煩聖慮只々大神宮及諸神に御祈禱被遊事專一と申上げ置候へ共此度は宸襟彌不安開闢以來不受外夷之點汚當朕之世諸夷如此有何面目謁見皇祖之廟萬一有事雖死社稷不辭之御決志也聞者上下一同に落涙致し報國の心を生じ候青蓮院宮は實に大塔宮の後身共可奉申御氣像にて主上親王共に三十歳餘英氣勃々難有事に候朝廷不可言無人只此度堀田侯へ如何に詔下り候哉商議中にて分り兼候天下の安危在此一詔夷人願には要地にて五市致度の由京都大阪或は堺にて開き度との事に候也○老兄よりの書翰は内々殿下へ差上置き候御取用に可相成哉は只今は分り兼候へ共何分にも商議可有之候委曲は跡より可申上候○砲の卦の儀も又々何様共周旋可仕候其節は智恩院宮薨去にて別に其人も無之只今は青蓮院宮有之宮は南都に幼年方御入後に粟田へ御住職河路氏も南都にて先年拜謁致し宮の英邁も能々承

不容私謁

知に付拜謁を願候處此度は公事に付上京之事不容私謁公事相濟候て後に可  
面會との事に候○省譽録は稿本有之候と仰に任せ借讀仕り候○癸丑上書草  
稿本返壁仕候

大闇の門に  
落首

一大闇の門に落首有之

西東忠と不忠の界町東は吾妻西は九重大闇の邸宅在

林家石清水八幡へ參詣にて祠官に就神酒を請候に付祠前の瓶子を賜り候處

酒味至酸歸館の夜腹痛大に起り畏れ入候之由或人狂歌に

林家 此度は儒者の取り置きまぬけ山御酒のすいのは神のばちく

先きの落首は經乙覽候由に付大闇も少々避易に候

安政五年二  
月一日か

〔七五六〕 八田慎藏に贈る

松代町 八田彦次郎氏藏

京都への儘  
かなる便

猶々今日は家來遠方へ遣し候間此御返事は何分も被勞貴僕被下度奉頼候  
又々大雪寒威も再び嚴冬の如く相成候御體履御礙も無御座候歎令愛御氣力如  
何の御様子や此程の驅蟲劑效を呈し候や否承度奉存候然ば此地より京都への  
儘かなる便は随分御座候ものや僅かの書狀位如何致し候はゞ速に相達し可申

や御教示被下度奉冀候松本よりは月々定飛脚なども可有之と存じ候がいかゞ  
や乍御面倒一寸御批誨所仰に御座候以上

二月朔

子 靜 令 友 几 下

大 星 拜

安政五年二  
月廿六日

〔七五七〕 山寺源大夫に贈る

此間は何かと御用多に被成御座候よしの所縷々御誨答難有奉謝候其節御惠示  
被成下候數種寫し留め可申者も卒業に付今日は返壁可仕と奉存候所へ御使管  
を勞させられ阿蘭條約御示被成下毎々御禮難申盡奉存候長崎の方條約立派右  
は水筑州の力にも候歎に被思召候よし去る事も可有御座候何れ一讀の上愚管  
も御座候はゞ可申上候亞使節云々の事は近日大槻俊齋より野家への文通内  
内瞥見候所いかにも左様の様子に御座候ひき佐倉侯御上京は全く林氏とは別  
事の沙汰も御座候よし是式の事にも紛々の説御座候へば京師の御方儘に探索  
も有之度と申遣候所其説行はれず果して今に約説もさだかならず候事不及是

雲如

昌篠卷

非候仙臺佐賀兩侯云々の虚傳なるべき事左も有之べく乍去是とて其慥かな  
 る義はいかにも慥に致し置き申度ものに御座候さて此間は雲如も罷出候よし  
 何かと御清興と不勝健羨候昌篠卷御寫し御垂示是又奉多謝候卷中の詩格別に  
 存じ候も無之候横山生より課題御目にかけて候内齋後解環の出典御尋に御座候  
 是は戰國策に見え申候米囊花は或人の申候通罌粟の事に無相違候三體詩にも  
 馬頭初見米囊花の句相見え候今日の御下問の内忽の字等の假名に用ひ候事常  
 の事に御座候尤も合轉の字故にフオと呼び候はんは音に叶はず王脈が胡海時  
 傳の書名は随分存じ居候へば其書は見及候事無御座候精傳別裁是は雜と一涉  
 仕候のみ藏弄は不仕候先は拜復迄早々申上候數種の返上もの宜しく御檢納可  
 被成下候以上

精傳別裁

廿六日

星巖へ御寄せ被成候高調乍例妙絶奉撃節候起二句は高意の通御原作の方雄  
 律尤可然候五言上三下二の句古詩十九首中よりして韓傳などには往々有之  
 候其餘は遠山生申上候所可宜候尤も末に一ヶ所愚意有之候浮簽上認置候御

取舍唯命に奉存候

使無堂先生 丈室

恪

拜復



昭和十年三月二十五日印刷  
昭和十年四月一日發行

象山全集 全五卷

定價 金拾八圓

長野市旭町一〇九八番地

編纂者 信濃教育會

代表者 清水曉昇

長野市妻科一七三番地

發行人 大日方利雄

長野市南縣町六五七番地

印刷所 信濃毎日新聞株式會社



Handwritten signature or initials.

長野市南縣町

發行所

信濃毎日新聞株式會社

電話長野三〇二四〇・二五三・三三三番  
振替口座長野一三〇番

986  
2

終